

千人塚

一般県道平・阿尾線地方特定道路事業に伴う試掘調査概要

2009年12月

水見市教育委員会



卷首写真1 千人塚遠景（南から） 中央奥は石動山



卷首写真2 千人塚近景（南東から） 右方は板石塔婆「キリーク」塔



卷首写真3 板石塔婆「キリーク」塔

千人塚

一般県道平・阿尾線地方特定道路事業に伴う試掘調査概要

2009年12月

水見市教育委員会

序

氷見市の北方、越中と能登の国境には、古くから山岳信仰の靈場として崇められてきた石動山がそびえています。石動山への主な登山道は「石動山七口」といわれ、越中側の氷見には3つの登山道があります。

平成8年、越中側の登山道のひとつ大窪道が、中世における石動山天平寺への主参道として、文化庁が選定する「歴史の道百選」に選ばれました。その大窪道の路傍に立地し、重要な構成要素にあげられるのが上戸津宮に所在する千人塚です。

今回の調査の原因となった一般県道平・阿尾線の改良工事は20年以上前から計画が進められてきた事業です。そのため、計画の策定以後に埋蔵文化財包蔵地となった千人塚の保護、あるいは歴史の道としての大窪道の保全については考慮されていませんでした。

幸い、富山県高岡土木センター氷見土木事務所に遺跡の重要性を認めていただき、保護のためのご協力を得ることができました。協議の結果、千人塚に隣接する市道の拡幅工事では、千人塚を避けるよう再設計され、遺跡の大部分を保存していくことが可能となりました。とはいっても、周辺の地形は大きく改変されてしまうため、地形を詳細に記録し、遺跡周辺部の現況を明らかとすることを目的として、測量調査および試掘調査を実施いたしました。

遺跡の保存協議および今回の調査にあたり、多大なるご協力をいただいた富山県高岡土木センター氷見土木事務所、上戸津宮地区および地権者をはじめとする関係者の皆様方にこの場を借りまして、厚くお礼申し上げます。

平成21年12月

氷見市教育委員会
教育長 前辻 秋男

例　　言

- 1 本書は、平成 21 年度に実施した富山県氷見市戸津宮地内に所在する千人塚の試掘調査報告書である。
- 2 調査は、一般県道平・阿尾線地方特定道路事業に先立ち、富山県高岡土木センター氷見土木事務所の委託を受けて、氷見市教育委員会が実施した。
- 3 調査は、富山県からの委託金で実施した。
- 4 調査対象面積は約 2,510m²、発掘調査面積は約 37.2m²である。
- 5 試掘調査の期間は、平成 21 年 8 月 6 日より平成 21 年 9 月 7 日（実働 10 日）である。
- 6 調査事務局は、氷見市教育委員会生涯学習課に置き、副主幹鈴木瑞磨・大野究、学芸員廣瀬直樹が監査事務を担当し、課長齊住哲郎が総括した。
- 7 調査および本書の執筆・編集は、廣瀬が担当した。
- 8 測量調査及び空中写真的撮影は、株式会社エイ・テックに委託した。
- 9 調査に関わる資料は、氷見市教育委員会生涯学習課が保管している。
- 10 発掘作業員の派遣は、社団法人富山県シルバー人材センター連合会に委託し、氷見市シルバー人材センターから作業員の派遣を受けた。調査に参加した作業員は次のとおりである。

発掘作業員：上岡 優・川上俊雄・小島忠夫・高畠政信・森忠次郎・山下 進・横田 清
(以上、氷見市シルバー人材センター)

- 11 調査・本書作成にあたり、下記の方々・機関から多大なご教示・ご協力を得た。記して感謝申し上げる。

富山県高岡土木センター氷見土木事務所・富山県教育委員会生涯学習・文化財室・富山県埋蔵文化財センター・氷見市立博物館・戸津宮地区・西井龍儀（氷見市文化財審議会委員）・宮田進一（富山県埋蔵文化財センター）・小堀卓治（氷見市立博物館）

目 次

第1章：遺跡の環境	1
第1節：地理的環境	1
第2節：歴史的環境	2
第2章：調査の概要	5
第1節：調査に至る経緯	5
第2節：調査の経過	6
第3章：調査の成果	8
第1節：遺跡の現況	8
第2節：調査前の知見	8
(1) 八代仙ダム建設計画関連調査	
(2) 歴史の道百選の選定と平成13年度の試掘調査	
(3) 水見市内遺跡詳細分布調査事業（丘陵地区）と『水見市史 文化遺産』	
第3節：測量調査の成果	12
第4節：試掘調査の方法	21
第5節：試掘調査の成果	21
(1) トレンチI	
(2) トレンチII	
(3) トレンチIII	
(4) 周辺の石造物	
第4章：まとめ	28
引用・参考文献	29
報告書抄録	

挿 図 目 次

第1図 千人塚と周辺の地形	1
第2図 周辺の主要な遺跡	3
第3図 石動山登山道と 主要板石塔婆位置図	4
第4図 一般県道平・阿尾線地方特定道路 取付道路計画平面図	7
第5図 板石塔婆「キリーク」塔実測図	10
第6図 近世板石塔婆実測図	10
第7図 千人塚測量図	11
第8図 千人塚全体平面図	13
第9図 千人塚平面図(1)	14
第10図 千人塚平面図(2)	15
第11図 千人塚平面図(3)	16
第12図 千人塚断面図	17
第13図 千人塚詳細平面図(1) 経塚伝承地	18
第14図 千人塚詳細平面図(2) 北側墓所	19
第15図 千人塚詳細平面図(3) 千人塚	20
第16図 トレンチ断面図(1)	23
第17図 トレンチ断面図(2)	24
第18図 トレンチ断面図(3) 板石塔婆「キリーク」塔立面図 トレンチII北端平面図	25
第19図 石造物尖測図	27
第20図 天正立石・一里塚西下塔尖測図	29

写真図版目次

卷首写真1 千人塚遠景(南から)

卷首写真2 千人塚近景(南東から)

卷首写真3 板石塔婆「キリーク」塔

図版1 1. 千人塚遠景(南東から)

2. 千人塚遠景(東から)

3. 千人塚遠景(北から)

4. 板石塔婆「キリーク」塔

5. 大窪道から見上げた「キリーク」塔

図版2 1. 千人塚近景(南東から)

2. 千人塚近景(南から)

図版3 1. 水田地区近景(南東から)

2. トレンチⅠ完掘状況(南東から)

3. トレンチⅠ完掘状況(東から)

4. トレンチⅠ完掘状況(北東から)

5. トレンチⅠ西壁(南側・北東から)

6. トレンチⅠ西壁(北側・東から)

7. トレンチⅠ南壁(東側・北から)

8. トレンチⅠ南壁(西側・北から)

図版4 1. トレンチⅡ完掘状況(南東から)

2. トレンチⅡ西壁(南側・北東から)

3. トレンチⅡ西壁(中央・東から)

4. トレンチⅡ西壁(北側・南東から)

5. トレンチⅡ西壁(北側・東から)

6. 「キリーク」塔下部の根石

図版5

7. トレンチⅡ北壁(西側・南から)

8. トレンチⅡ北壁(東側・南から)

1. 「キリーク」塔(正面)

2. 「キリーク」塔(左側面)

3. 「キリーク」塔下方の集石

4. 「キリーク」塔(右側面)

5. 「キリーク」塔下部の泥岩

6. 「キリーク」塔(背面)

1. 「キリーク」塔正面の彫刻

2. 東斜面小平坦面(北から)

3. 東斜面小平坦面(南東から)

4. トレンチⅢ西壁(南東から)

5. トレンチⅢ北壁(南から)

1・2. 千人塚上の石造物・自然石

3・4. 板石塔婆(1)

5・6. 板石塔婆(2)

1. 千人塚上の裁田石製石造物

2. 千人塚周辺の骨壺破片

3. 千人塚北側墓所の石造物

4. 五輪塔(火輪)

5. 近世の板石塔婆と一石一尊仏

6. 寺院伝承地(南西から)

7. 経塚伝承地(北から)

8. 経塚伝承地(西から)



作業風景

第1章 遺跡の環境

第1節 地理的環境(第1図)

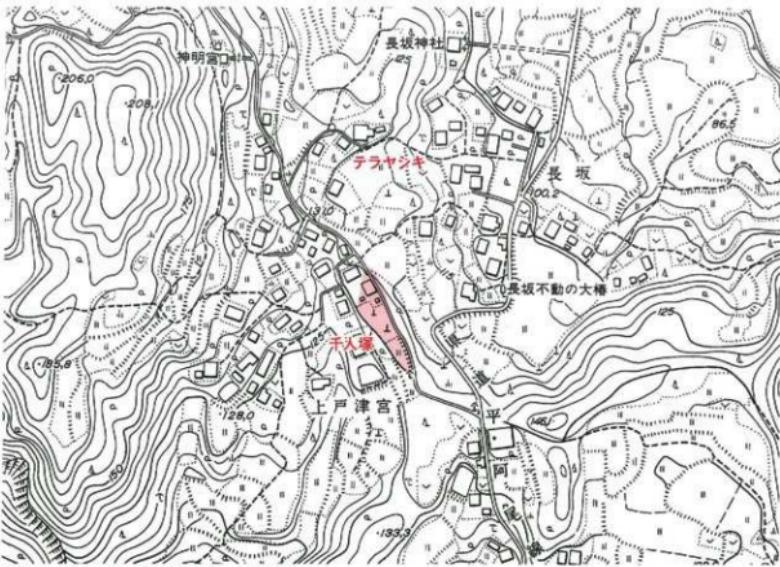
氷見市は、富山県の西北部に位置し、能登半島の基部東側にあたる。昭和27年の市制施行から昭和29年までに旧太田村を除く氷見郡1町17村が合併し、現在の氷見市が成立した。面積は約230km²、人口は約5万4千人である。

市域は、北・西・南の三方が標高300~500mの丘陵に取り囲まれ、これら丘陵から派生する小丘陵により、西条・十三谷・上庄谷・八代谷・余川谷・灘浦の6つの区域に分けられる。また市の東側は、約20kmの海岸線をもって富山湾に面している。

灘浦地区は、宇波川、下田川などの小河川が流れる市の北部地域で、丘陵が海岸にせり出し、平野が比較的少ない地形である。県境を越えた北西、石川県鹿島郡中能登町には石動山(565m)がそびえる。

戸津宮は、宇波川上流の谷間に位置し、石動山の東南麓を占める。平地は少なく、大部分は丘陵山地である。一般県道平・阿尾線に沿って上戸津宮と下戸津宮の二つの集落に分かれる。上戸津宮は台地上にあり、俗にオオクボ(大窪)とも呼称する(氷見市2000)。

千人塚は、石動山から南東に向て派生する尾根上、標高約137mに立地する。石動山大御前からは、南南東の方向、約3.6kmの位置にある。千人塚の東側には現在舗装された市道が通るが、この道は石動山登拝道のひとつ、大窪道である。下戸津宮から登ってきた大窪道は、現在一般県道平・阿尾線として整備されており、そのまま直進すれば長坂へ至る。大窪道は上戸津宮の峠で左へ折れ、上戸津宮の集落を通って石動山へ向かう。千人塚は、峠の分岐点から100mほど進んだ地点、上戸津宮集落の入り口に所在する。塚から北側は墓所、塚の南側は水田として利用されている。



第1図 千人塚と周辺の地形 (S=1/5,000)

第2節 歴史的環境(第2・3図)

灘浦地区は、丘陵が海岸にせり出しており、平野が比較的少ない地形であるが、縄文時代前期末から中期にかけて海岸部の平野や断崖に穿たれた海食洞の利用が始まっている。縄文時代の遺跡としては、大境洞窟遺跡(国指定史跡)や大境エンニヤマ下洞窟遺跡、泊洞窟遺跡などの洞窟遺跡、前期末に入々が渡った虹が島遺跡、海岸に面した丘陵部に営まれた中期後葉の中波貝塚がある。また千人塚の約400m北東に位置する長坂貢船遺跡は、中期末葉の集落遺跡と考えられる。

弥生時代から古墳時代には海岸部周辺を中心に生活が営まれたと推測される。人境洞窟遺跡で弥生時代中期中葉から古墳時代後期の遺物が出土しているほか、宇波川の流域を中心に古墳群や横穴墓群が分布している。

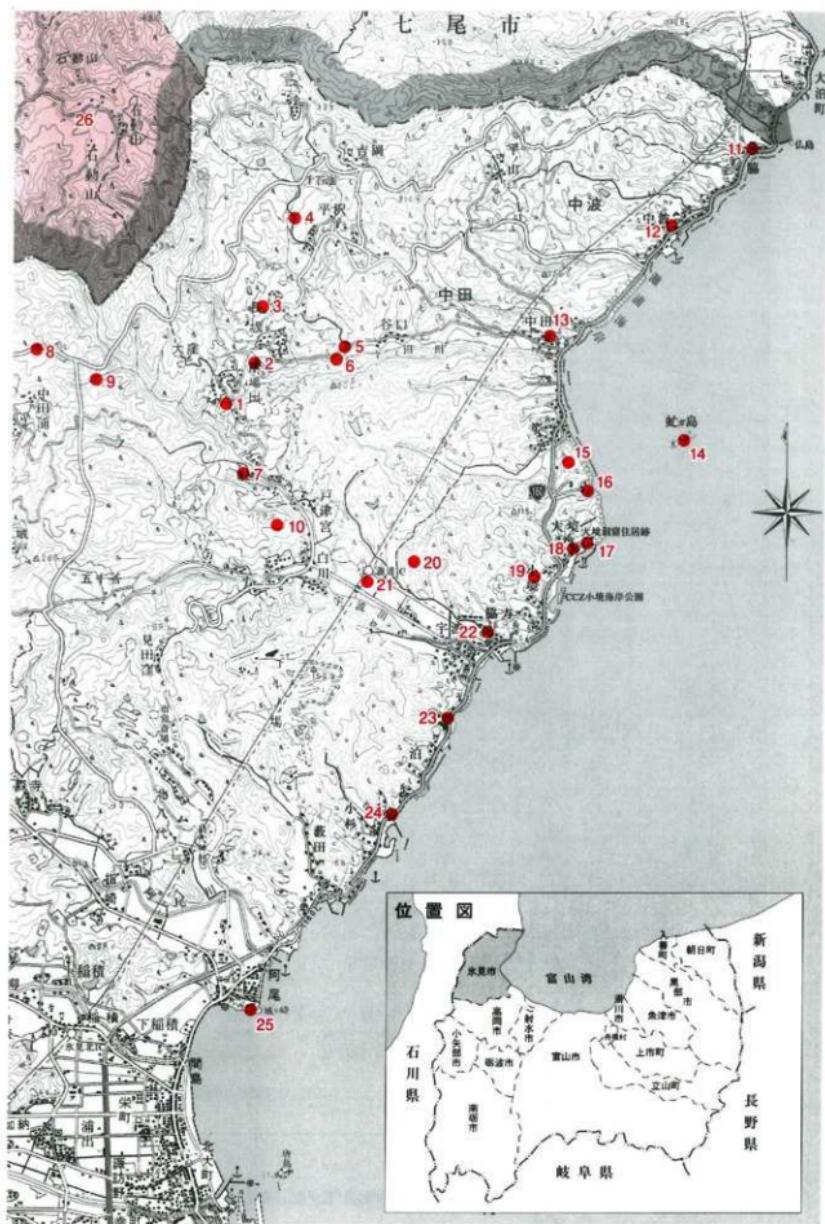
古代の遺跡としては、7世紀後半から8世紀の集落跡である宇波西遺跡、7世紀初めから8世紀初め頃まで製塩が営まれた九殿浜遺跡がある。

石動山に所在する石動山天平寺(石動寺)は、古代から修驗道で栄えた。最盛期の中世には360余りの院坊と衆徒3000人を擁したと伝えられる。政治的な影響力も強く、南北朝の動乱期だった建武2年(1335)と戦国期の天正10年(1582)の2回にわたって兵火に焼かれている。中世・近世の灘浦地区はこの石動山天平寺の強い影響を受けており、千人塚をはじめとして多数の遺跡が所在する。戸津宮中世墓群、長坂行入塚、長坂落合中世墓、長坂ソウト遺跡、脇方谷内出中世墓、脇中世墓群などの中世墓群や各所に集積された石造物なども石動山信仰に関連する可能性があろう。なお、石動山への主な登山道は石動山七口といわれ、越中側には平沢口(平沢道・長坂道)、大森口(大森道・八代仙道)、角間口(角間道)の3つの登山道があった。その中でも特に中世において越中側からの主参道となつたのが大窓道である(第3図)。富山湾に面した阿尾城下を起点とし、石敷の道、道標、千人塚の板石塔婆「キリーク」塔をはじめとする多数の石造物、寺坊跡などの伝承地が残る。さて、千人塚の「キリーク」塔のほかにも、梵字を刻んだ自然石の立石(板石塔婆)が石動山の登山道の路傍に多数確認されており、これらは石動山寺域の勝示石・界石と考えられている。また梵字はないが、平沢道沿いにある一里塚と呼ばれる塚上には自然石の立石が立つ。立石の周辺に敷き詰められた円礫の中には一字一石経も混じる。

前述のように石動山天平寺は、上杉方の温井・三宅氏に加勢したことにより天正10年(1582)、前田利家によって焼き討ちされている。だが、天正11年(1583)には正親町天皇によって再興の諭旨が下され、天平寺諸堂の再建が進められることになる。その任に当たつたのが前田利家に従っていた16人の大工である。彼らは天正15年(1587)、石動山大葬道沿いの人蔭村に屋敷地を与えられ、大塙大工と称した。大塙大工の後裔は、多くの社寺建築のほか、五箇山・白川地方の合掌造り民家などを手掛けた。この大塙大工が持領した大塙村の屋敷地が、現在千人塚の北側にある戸津宮の集落である。

周辺の主要な遺跡

- | | | |
|-----------------|------------------------|--------------------|
| 1 千人塚(中世・近世) | 10 白河城跡(南北朝・戦国) | 19 鰐塚(中世) |
| 2 長坂貢船遺跡(縄文) | 11 脇中世墓群(中世) | 20 宇波城跡(中世) |
| 3 長坂ソウト遺跡(中世) | 12 中波貝塚(縄文) | 21 宇波西遺跡(弥生～近世) |
| 4 平沢一里塚(中世・近世) | 13 鬼城跡(弥生・戦国) | 22 脇方谷内出中世墓(中世) |
| 5 長坂行入塚(中世) | 14 虹が島遺跡(縄文・古代～近世) | 23 宇波洞窟遺跡(不明) |
| 6 長坂落合中世墓(中世) | 15 姿塚跡(戦国) | 24 泊洞窟遺跡(縄文) |
| 7 戸津宮中世墓群(中世) | 16 九殿浜遺跡(縄文～中世) | 25 阿尾城跡(弥生・中世・近世) |
| 8 尾端城跡(中世) | 17 大境洞窟遺跡(縄文～中世) | 26 国指定史跡石動山(古代～近世) |
| 9 八代仙行場跡(中世～近代) | 18 人蔭エンニヤマ下洞窟遺跡(縄文・弥生) | |



第2図 周辺の主要な遺跡 (S=1/50,000)



第3図 石動山登山道と主要板石塔婆位置図

(西井2007より転載。原図は国土地理院発行の1/25,000地形図「虻が島」「能登二宮」により作成)

第2章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

平成19年6月27日、戸津宮地内を訪れた氷見市教育委員会生涯学習課の職員が、千人塚の東側、市道を挟んだ場所の立木に伐採の日印が付けられているのを見発した。教育委員会は、その時点では工事の予定について把握していなかったため、すぐさま情報の収集を開始した。地元や氷見市建設課に問い合わせたところ、上戸津宮地区で、一般県道平・阿尾線のバイパス建設に伴う市道の付け替えが計画されているという情報を得た。この市道の工事は県道の建設に伴うものであるため、富山県高岡土木センター氷見土木事務所が担当しているとのことであった。

この市道は歴史の道百選「石動山道(大窪道)」の一部であり、市道横には大窪道に関わる文化財で、埋蔵文化財包蔵地でもある千人塚が隣接しているため、急ぎ大窪道ならびに千人塚への影響を確認することが必要となった。そのため、7月17日には氷見土木事務所の担当者を交えた協議を実施した。

協議では、市道の付け替えにより千人塚は完全に消滅し、近辺の大窪道も大きく改変される計画であることが判明した。現在の路線計画図は昭和の頃に計画、平成2年度に設計されたものであるとのことで、氷見土木事務所ではその時期に埋蔵文化財の照会をして、周辺に埋蔵文化財包蔵地が無いことを確認した、という。歴史の道百選が選定されたのは平成8年、千人塚が埋蔵文化財包蔵地として新規登録されたのは平成16年であるため、遺跡の存在が認識されていなかったのである。

山間を開削して通される県道バイパスは、現標高より10m近く掘り下げ、その上を市道が高架として通る。その高架と高さを合わせるため、千人塚周辺で現市道(大窪道)を拡幅し、掘り下げる計画となっている。市道から東側は長坂地区であるが、急な斜面のため拡幅は難しい、という。そのため千人塚側である西側に拡幅することになっており、計画が実施されれば千人塚は完全に消滅してしまうことになる。

付け替えられる市道は、現在の道と県道バイパスを接続し上戸津宮地区的住民の生活道路を確保するためには不可欠の道であり、地元からの要望もあるのだという。

なお、協議に先立ち、富山県教育委員会生涯学習・文化財室に歴史の道における開発行為に関して確認したところ、歴史の道については開発行為に関する法的な規制はないとのことであった。だが、現在の計画のままでは千人塚は破壊され、歴史の道百選に選ばれた「石動山道(大窪道)」もその価値を減じさせてしまうことになる。氷見市教育委員会としては、千人塚の消滅は不得手の限り避けなければならない事態である。ただ、当該市道の敷設は地元からの要望もあり、工事を進めなければならないという氷見土木事務所側の意向と意見をすり合わせて、より望ましい方向性を模索していく必要があった。そのため協議では、氷見市教育委員会として以下の意見を出した。

- ・千人塚は、「石動山道(大窪道)」の選定に関わる重要な遺跡であるため、消滅は回避しなければならず、氷見市教育委員会としては現計画のままの工事実施は許可できない。
- ・大窪道と千人塚は密接に結びついており、板石塔婆「キリーク」塔も含めた三者の関係性は一体的に保存されるべきである。ただし、現在の大窪道自体、舗装により改変されたものであり、これ以上の開発を止める根拠は薄弱である。そのため市道の拡幅・付け替えにはある程度の妥協は可能と考える。
- ・千人塚の立地する墓所は、現況のままの保存とする。
- ・ほかにも塚が存在したと伝承される千人塚南側の水田と北東側の経塚伝承地に関しては、試掘調査で状況を把握し、現状保存か記録保存かの判断をする。
- ・氷見土木事務所は、千人塚の保存が可能な工法を検討する。
- ・氷見市教育委員会は、千人塚およびその周辺の現地測量と試掘調査を実施するものとし、その費用については富山県の負担をお願いしたい。

これを受け、水見土木事務所は千人塚の保存が可能な工法への再設計を開始した。また、水見市教育委員会は現況地形の測量および試掘調査の予算化に向けて動き出した。

平成19年12月18日、水見土木事務所から新たな市道の線形案の図面を送付してもらい内容を確認した(第4図)。その内容は、千人塚および「キリーク」塔、経塚伝承地を現況保存できるものだったため、この案に関しては問題ない旨を水見土木事務所に伝え、事業は修正後の線形案で進められることになった。ただ、この線形案では、千人塚および「キリーク」塔と経塚伝承地の現況保存が可能なものではあったが、千人塚南側の水田および東側斜面の小平坦面は削除されてしまう。前述のように、現在水田となっている場所はかつて塚が存在したと伝承される。また東側斜面の小平坦面には何らかの造構の存在が予想される。加えて、すぐ近くまで斜面が削除されることになる「キリーク」塔については、過去の調査で中世以来の原位置を保っていると推測されるもので、下部や周辺に造構が存在する可能性がある。そのため、いずれにしても事前の測量調査・試掘調査が必要であろうと判断した。まず、大窪道はすでに舗装されたものとはいえ、大きく路線が変更されることになり周辺の地形も変わってしまうため、経塚伝承地と水田部分を含めた遺跡全体の詳細な測量調査を実施する。合わせて、工事の影響を見極め、本発掘調査の必要性の有無を判断するために試掘調査を実施する。試掘調査の対象とする地点は、南側の水田地区・「キリーク」塔周辺・東斜面小平坦面の3か所とした。

平成20年度に入り、水見市教育委員会と水見土木事務所は、測量調査および試掘調査の実施に向けて具体的な協議を進めていった。他の事業との調整も受け、平成20年度は調査準備期間とし、現地での調査は平成21年度に実施することになった。

第2節 調査の経過

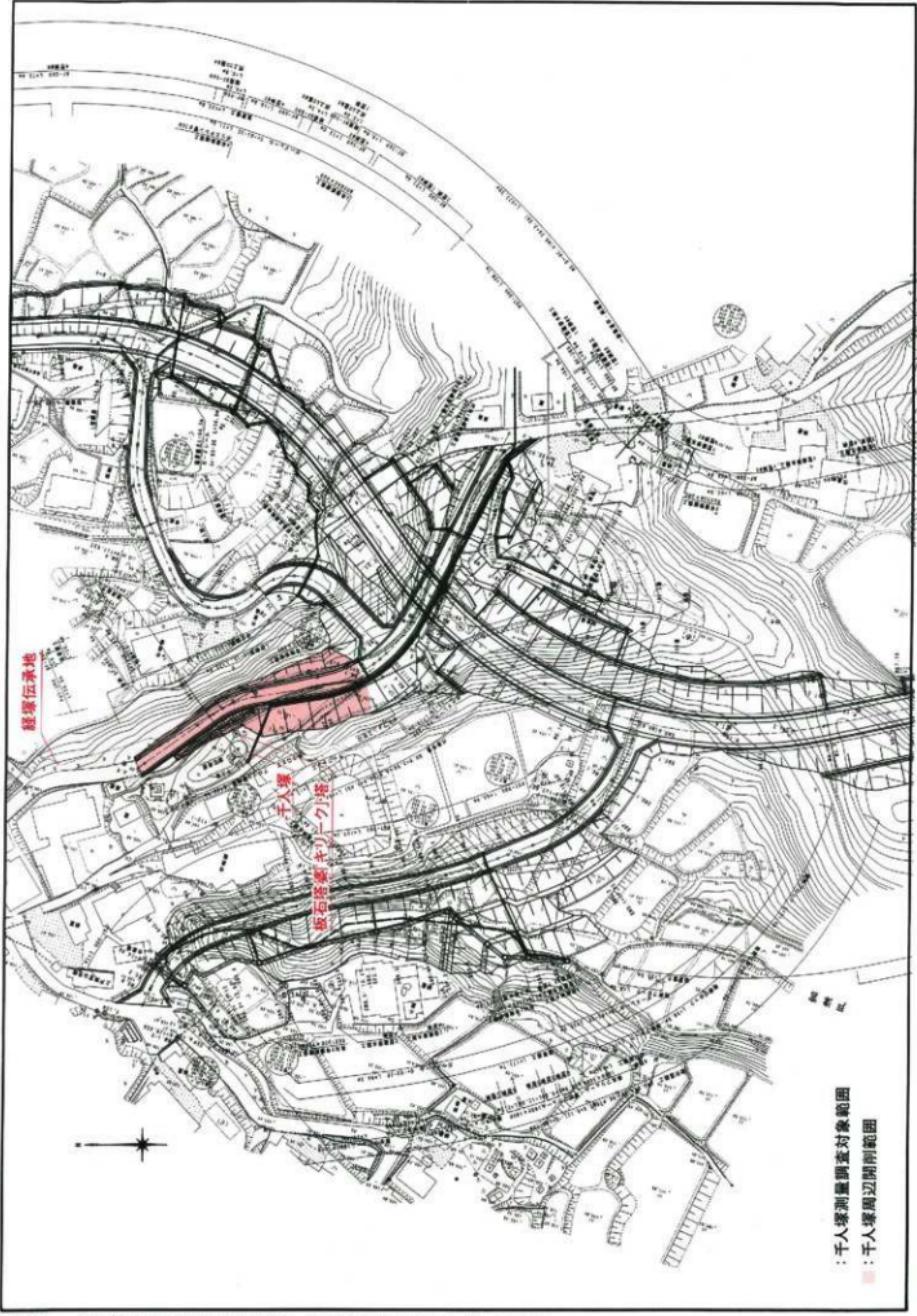
平成21年3月18日付けで、富山県と水見市の間で、一般県道平・阿尾線地方特定道路事業に伴う埋蔵文化財確認調査委託業務契約を締結した。

平成21年4月から、測量業務委託の契約事務等を進めた。入札の結果、測量業務は、株式会社エイ・テックが実施することになった。5月12日に委託契約を締結し、直ちに現地での作業に着手した。測量業務は、試掘調査とも並行して実施し、9月25日に終了した。

測量業務を進める一方で、試掘調査業務に関しては作業を進めていった。5月29日には、株式会社エイ・テックによる空中写真の撮影を実施した。

試掘調査の現地作業は、8月6日に着手した。調査機材を現地に搬入し、調査対象地の草刈りを実施した。草刈り後、水田地区にトレント工を設定し、翌7日より掘削を行った。また、「キリーク」塔周辺にトレントⅡ、東斜面小平坦面にトレントⅢを設定して掘削を行った。作業員による掘削は12日で終了し、その後は、写真撮影・トレント断面図の作成・「キリーク」塔の実測および拓本等の作業を実施した。13日に西井龍儀氏(水見市文化財審議会委員)、21日には宮田進一氏(富山県埋蔵文化財センター)が来訪し、現地を実見していただいた。27日には埋め戻し作業を実施した。また埋め戻し作業と並行して「キリーク」塔の周辺を掘削し、記録を行った。9月1日と7日の2回にわたり、補足で周辺地形の写真撮影を行った。また7日には千人塚北側の墓所に寄せられている五輪塔(火輪)2基の写真撮影と実測を行った。以上で現地での作業は終了した。

現地調査終了後、整理作業、報告書の作成を行った。



第4図 一般国道平・阿尾線地方特定道路 取付道路計画平面図 (S=1/1,500)

第3章 調査の成果

第1節 遺跡の現況

千人塚は、別に「戦入塚古戦場」とも呼ばれ、石動山合戦の戦死者を弔ったものとも、この場所が主戦場であったとも伝えられる。周辺には、塚と大型の板石塔婆「キリーク」塔のほか、中世の石造物、近世の石造物があり、市道を挟んで経塚伝承地が所在する。中世から近世の石動山信仰に関連する遺跡である。

下戸津宮から上り津宮へ、一般県道半・阿尾線を登ってくると峠で市道と分岐する。分岐点から左に曲がり、市道の緩斜面を登り詰めた地点には細長い水田が開かれている。市道は水田の東側を回り込み、水田の西側には市道から分岐した小道が延びる。この東側の市道と西側の小道に挟まれた小丘陵が、千人塚と称されている場所である。水田の北側に塚状の遺構が1基あり、この塚が狭義での「千人塚」である。塚の北側、小丘陵上は墓所となっており、現在は墓所を含めた周辺が「千人塚」と呼ばれている。また、水田となっている塚の南側にもかつては墓所が続いていたとの伝承がある。市道の東側は急斜面となり、斜面の下には隣接する長坂の集落が散在する。小道の西側は作業場・宅地として利用されているが、さらに西側は谷地形が入り込んでおり、谷の下方は畑として利用されている。なお塚南側の水田は近年まで耕作されていたが、現在は用地買収に伴い休耕田となっている。

千人塚東側の市道がかつての大窪道と考えられているが、その一方、西側の小道が元来の大窪道で市道は後に開削されたもの、との見方もあり、地元での聞き取りでも両方の意見を聞くことができる。

塚の東側、ちょうど塚と市道の間の小平坦面には、下半が埋もれた大型の板石塔婆「キリーク」塔が立つ。「キリーク」塔は、地上高65cmを測る。なお、梵字「キリーク」は市道の側に向けられている。市道が大窪道だとすれば、「キリーク」塔の正面が大窪道を向いていることになる。

塚の北西には、現在の墓石が塚と重複して建てられている。塚上には、中世の方錐角柱形板石塔婆が2基横たえられているほか、板石や自然石が置かれている(図版7-1・2)。また、一部に近世以降と見られる素焼きの骨壺破片が散乱している(図版8-2)。塚北側の墓所には、中世の五輪塔(火輪)2基が寄せられている。また墓石の周りには近世と見られる板石塔婆が並べられている(図版8-3~5)。千人塚と墓所の間の小丘には、幹周り4.6mのタブノキ(イヌグス)の日本のはか、スギヤツバキが生育し、周辺は鬱蒼とした森になっている。

千人塚の北東、墓所とは市道を挟んだ位置にも塚状の遺構が1基あり、経塚と伝承されている(図版8-7・8)。この経塚伝承地の北東側はなだらかな斜面が続き、下方に水田が広がっているが、水田に囲まれて、現在は墓所として利用される約30m四方の小高い丘がある。この周辺には寺院の存在が伝承され、丘の北側の水田は「テラヤシキ」と呼ばれている(第1図・図版8-6)。

第2節 調査前の知見

(1) 八代仙ダム建設計画関連調査

昭和53年10月に国指定史跡となった石動山の石川県側に対し、富山県側の石動山関連遺跡群については実態把握がされていないという状況の中、昭和56年、八代仙ダム建設計画が策定された。これは、氷見市北部水田地帯の水不足解消と守波川流域の洪水被害除去を目的とした県営灌漑排水事業・県営防災ダム事業の一環であり、氷見市下戸津宮地区の宇波川上流にダムを建設する計画であった。このダム建設計画が計画どおり実施された場合、石川県域にある国指定史跡石動山の一部と、工区内に残存しているかもしれない石動山関連の遺跡・遺物が、その実態が不明のまま失われる可能性があった。対応を迫られた富山・石川両県教育委員会と氷見市・鹿島町(現中能登町)の各教育委員会では、協議と現地視察を重ねていった。まず、富山県側の系統的な調査資料を整えるため、富山県石動山遺跡調査委員

会が発足し、昭和57・58年の2か年にわたり、富山県域の石動山信仰に係る文化財等の調査が実施された。次いで、昭和59年には富山県・石川県・永見市・鹿島町合同による八代仙ダム建設計画に係る文化財保護調査委員会が設置、翌年には八代仙ダム建設計画に係る文化財調査団が編成され、水没予定地ならびに関連工事区域の埋蔵文化財・生物・地形・地質等に関する調査が実施された。これら八代仙ダムに関連した調査の成果については、昭和59年『富山県石動山信仰遺跡遺物調査報告書』、昭和61年『八代仙ダム建設計画に係る文化財調査概報 一地形地質・生物・埋蔵文化財一』、平成元年『国指定史跡石動山文化財調査報告書 一八代仙ダム建設計画関連一』の3冊の報告書にまとめられている(石動山文化財調査團・永見市教委1989・永見市教委1984・永見市教委・八代仙ダム建設計画に係る文化財調査團1986)。

千人塚について取り上げられたのは、「富山県石動山信仰遺跡遺物調査報告書」が最初である。円仏三郎兵氏による聞き取り調査の成果として、時代は不明としつつも石動山合戦時の戦死者を弔ったもの、と紹介されている(円仮1984)。また同書には、京田良志氏、岡本恭一氏による石造物の現地調査の成果も掲載されている。この中では、千人塚について、天正合戦に結びつけた口碑があるとし、「キリーク」塔については正面いっぱいに押型彫された月輪と、同じく押型彫による梵字「キリーク」を評し、永見市小境に所在する變塚(永見市指定史跡)の貞和3年(1347)銘をもつ立石をさかのほる力強く頼もしい立石であり、千人塚の成立に関わるもの、としている(京田・岡本1984)。また板石塔婆「キリーク」塔については、「国指定史跡石動山文化財調査報告書」で櫻井甚一氏が、「雄壮な種子の筆法や洗練された蓮華座などから鎌倉後期の造立と認められる」としている(櫻井1989)。以上、どちらの報告書も共通して「キリーク」塔が14世紀中葉以前にさかのぼり得るものと評価している。

さて、こうして周辺部の文化財調査に年月を費やした八代仙ダムの建設計画であったが、結局この調査などによって十数年の間中断することとなり、平成9年には事業自体が見直されることになった。結果的に、永見市側の石動山信仰関連文化財の保護が図られることができたわけである。

(2) 歴史の道百選の選定と平成13年度の試掘調査

八代仙ダムの事業見直しに先立つ平成8年、大庭道が「石動山道(大庭道)」として、歴史の道百選に選定された。これは大庭道が、石動山への登拝道のひとつであり、中世における表参道と考えられること、道沿いには道標、板碑などの石造物が点在しているほか、寺坊跡や様々な伝説の残る地があることなどを一體的に評価したものであった。

歴史の道百選「石動山道(大庭道)」の活用が模索される中、平成13年度には永見市教育委員会が千人塚の試掘調査を実施した。調査では千人塚にトレーナーを設定し、塚の構造と板石塔婆「キリーク」塔の下部を把握することを主眼とした。

調査の結果、千人塚は地山である泥岩片を含む礫層を削り出して築造されており、盛土は表面に薄く盛られた程度であることが確認された。また「キリーク」塔については、前面にトレーナーを設定して掘り下げたところ、下部に根石があることが確認されたほか、月輪を受ける蓮華座の全体像も初めて明らかとなった(第5図)。この根石の存在によって、「キリーク」塔が造立当初の位置を保っている可能性が高い、と考えられた。

(3) 永見市内遺跡詳細分布調査事業(丘陵地区)と『永見市史 文化遺産』

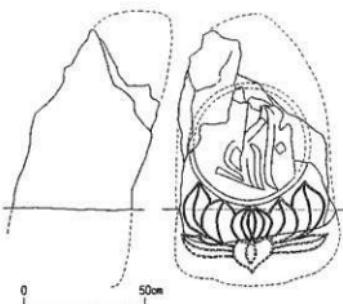
永見市教育委員会は、平成5年より永見市内全域を調査の対象とした分布調査事業を実施してきた。平成5年から11年が平野部、平成12年から14年が古墳群の確認を主眼とした丘陵部の分布調査を実施した。続く平成15年から17年にかけては、信仰遺跡や山城等の確認を目的として丘陵部の分布調査を継続することになり、その初年度が瀧浦地区的石動山関連遺跡の調査であった。

この分布調査では、新たに長坂落合中世墓と平沢一里塚遺跡が発見された。また、これら2遺跡と千人塚の測量調査を実施し、平面図を作成した(第7図)。その報告書『水見市埋蔵文化財分布調査報告(丘陵地区)IV』では、千人塚についての新たな知見を提示した。ここでは、千人塚北側墓所の墓地としての起源は室町時代にさかのぼる可能性があることを指摘したほか、大窪村(現在の上戸津宮)について、大津人工の移住が契機となって中世末に成立したと推定し、だとすれば、中世において大塚道をたどって石動山に登る場合、戸津宮(現在の下戸津宮)が最後の集落であり、ここから急な坂を登り終えたところに千人塚が位置していた、との考えを示した。また、千人塚、平沢一里塚遺跡、長坂落合中世墓を比較・検討し、いずれも石動山登軒道に面していること、いずれも立石もしくは大型の板石塔婆が据えられていること、千人塚と平沢一里塚遺跡は集落が途切れた見晴らしの良い場所に位置し、長坂落合中世墓は村境に位置することなどの共通点を見出した。これらの共通点は、3遺跡が本来は境界勝手の意味合いを持つものだったことを示すものと考えられる(水見市教委2004)。

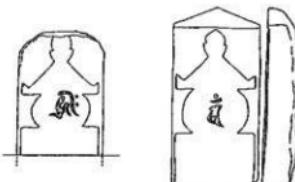
なお、分布調査報告書の刊行を受け、平成16年には長坂落合中世墓、平沢一里塚遺跡とともに千人塚を周知の埋蔵文化財包蔵地として登録している。

続く平成16年度の分布調査では、前年度の調査後に明らかとなった千人塚北側の経塚伝承地について、現地確認を実施した。経塚伝承地については、「天正十六年春越中水見郡大窪村大工屋敷之図」(高森駒喜代氏作図)に記入されている。この図は、大窪村に居住した大津人工の屋敷地を描いたもので、「戦人塚古戦場」(千人塚)の北側、大塚道を挟んだ位置に「経塚」と書き込まれている。また経塚のさらに北側には「寺」と書かれた区画が存在する。現地調査では、図中で「経塚」とされている地点に、塚状の造構が1基存在することを確認した。なお上戸津宮地区の高井秀一氏の話では、「屋敷地なり、大塚道なりを切り開いた際の残丘かもしれない、図に経塚と書かれている以上の伝承はない」とのことであった。また高井氏からは、図中「寺」とされている地点にある丘の北側が「テラヤシキ」と呼ばれているとの情報も得ることができた(水見市教委2005)。

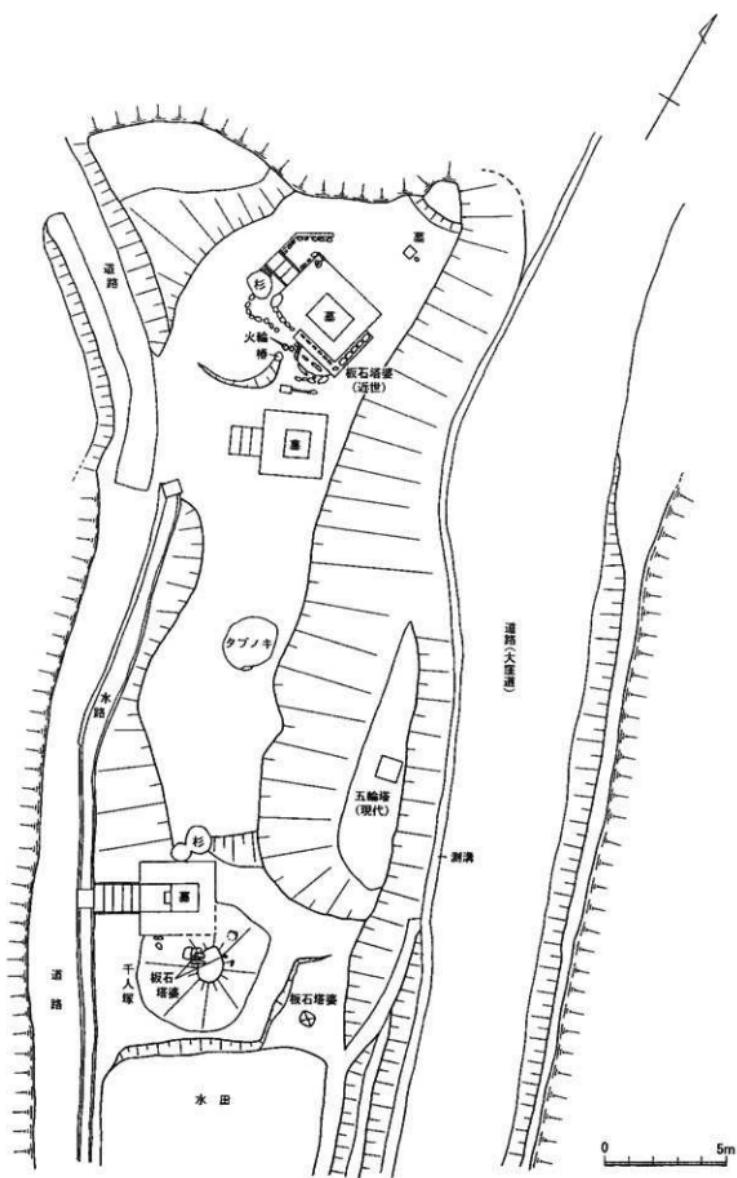
平成19年に刊行された『水見市史 文化遺産』では西井龍儀氏が「石動山登山道の主要板石塔婆」を著し、千人塚の「キリーク」塔について再評価している。まず、蓮華座について、「はっきりとした線刻とはいえ、線の動きに凹さが否めない」としている。また造立の年代については、「押型彫の月輪と梵字の影法に加え、逆弁や梵字の表現の凹さは模倣的で新しい要因といえまいか」とし、これまで捉えられてきた14世紀中葉以前という年代を下げ、15世紀代あるいはそれ以降の可能性も視野に入れるべき、との見方を示している(西井2007)。



第5図 板石塔婆「キリーク」塔実測図 (S=1/20)
(西井 2007 より転載)



第6図 近世板石塔婆実測図 (S=1/10)
(京田・岡本 1984 より転載)



第7図 千人塚測量図 (S=1/200) (冰見市教委 2004 より転載)

第3節 測量調査の成果(第8～15図)

測量調査では、周辺部の地形も含めて記録するため、狭義の「千人塚」である塚状遺構のほか、北側の經塚伝承地から、墓所、水田地区、市道東側の斜面までを調査対象とした。また、塚状遺構周辺、北側墓所の石造物集積地、經塚伝承地についてはより詳細な平面図を作成した(第13～15図)。

以下に測量調査で得られた知見を示しておく。合わせて、測量調査・試掘調査の際に地元の方より聞くことができた情報についても本節に記しておきたい。

千人塚(第10・12・15図)

北側の小丘から張り出す舌状地形の先端に築造された塚状の遺構である。塚は南北約4.8m、東西約5m、高さ約1m、頂部の標高136.36m、北側の鞍部との比高差約0.4mを測る。尾根を断ち切り、地山を整形して築造されている。頂部を中心に、中世の板石塔婆や板石、自然石が置かれており、塚に埋まつた石造物もある。

水田地区(第10・11図)

千人塚の南側に開かれた細長い三角形の水田で、長軸31.5m、短軸9m、標高約137mを測る。元来は、北側から延びてきた尾根筋が、現在水田となっている地点まで延びていたと推測される。伝承どおりであれば、この尾根上に千人塚同様の塚が築造されていたか、あるいは尾根自体が墓所として利用されていたのであろう。

地元の方の話では、水田が開墾されたのは昭和の初め頃だったようだが、その際に骨や刀が出土したという。そのときに大きな石を元の場所から動かし、石の根元に筈に2,3杯分の出土品を埋めたらしい。この「人きな石」というのが板石塔婆「キリーク」塔を指すのであれば、「キリーク」塔が水田地区にあったとされる墓所に造立されていた可能性がある。ただし、この移設したという「大きな石」が「キリーク」塔を指すのか、塚上にある方锥角柱形板石塔婆などの石造物のことを指すのかは不明確である。

板石塔婆「キリーク」塔周辺(第10・12・15図)

千人塚の東側に約28×17mの小平坦面があり、その中央に板石塔婆「キリーク」塔が半ば埋もれて立つ。小平坦面の標高は約137m、千人塚との比高差は約1.3mを測る。「キリーク」塔の正面はほぼ真東を向いている。

前述のとおり、「キリーク」塔は水田地区の墓所から移設された可能性がある。また、その移設説の中では、水田を開墾した際に出土した骨や刀を移設した石の下に埋めた、とも語られる。

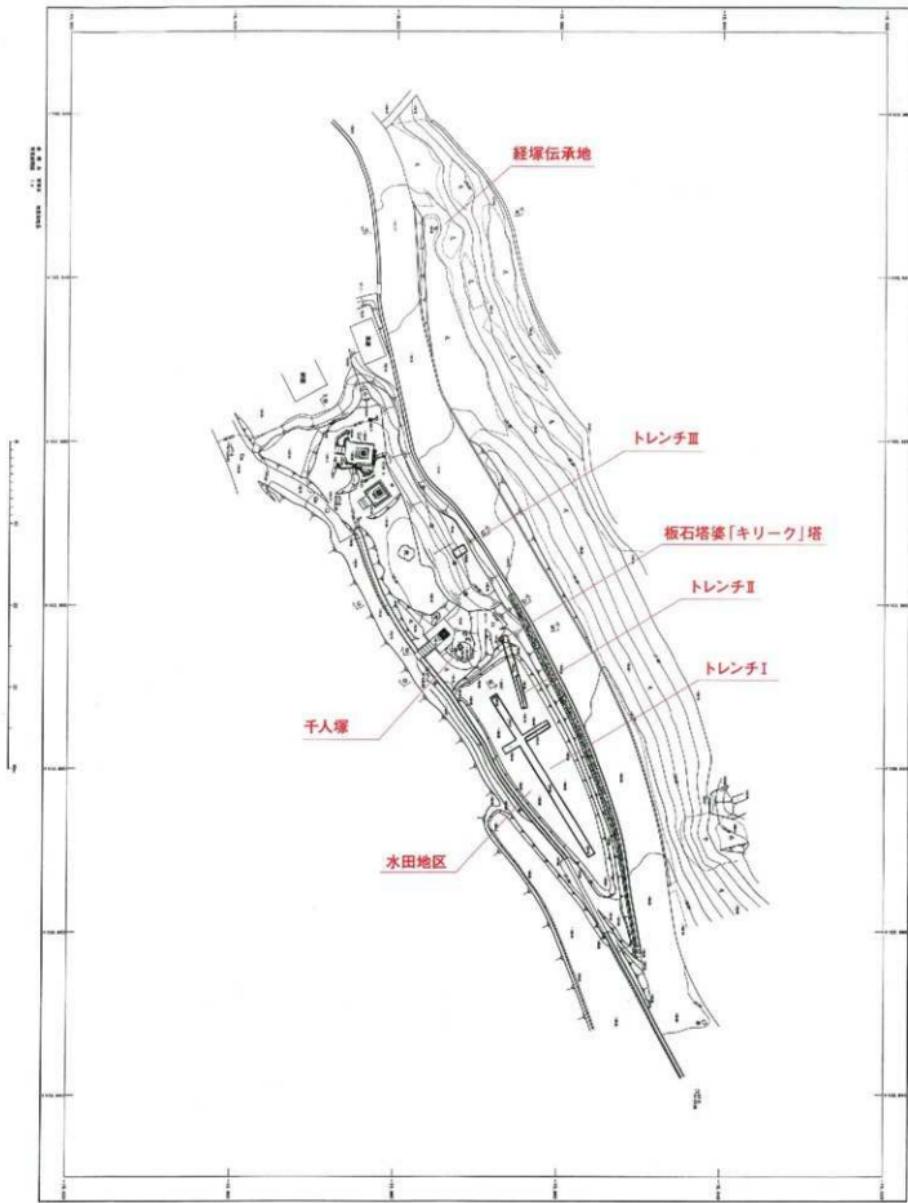
東斜面小平坦面(第10・12・14図)

千人塚と北側の小丘と市道の間にある南北方向に細長い平坦面である。長軸12m、短軸は最大で2m、標高約135.7m、小丘頂部(標高138.51m)との比高差約2.8m、市道との比高差約2mを測る。小丘から北側墓所にかけては、市道建設の際に東側の斜面が切り立てられたようにも見受けられるが、この小平坦面自体も市道の建設によって生じた副次的なものなのかもしれない。

なお、平成15年度の測量調査の時点では、小平坦面上には現代の五輪塔が立てられていたが、現在は撤去されている(第7図)。地元の方によると、小平坦面が墓地として利用されていたわけではなく、地権者の方が自分の土地の目印として置いていた、とのことである。

經塚伝承地(第9・12・13図)

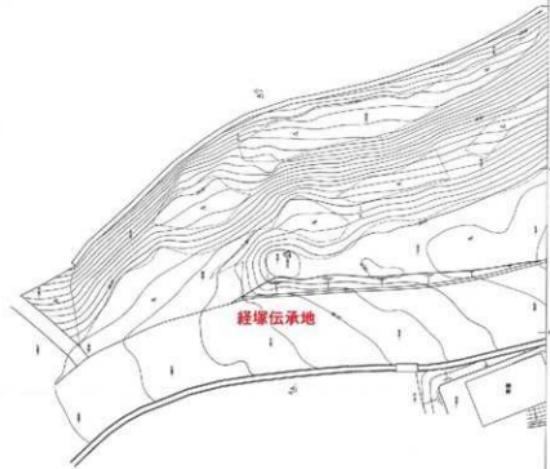
千人塚とは市道を挟んで約50mの距離に位置する。隅丸方形を呈する塚状遺構で、市道側の西辺は若干削平を受けている。南北約4.5m、東西約4m、頂部の標高132.44m、南側鞍部との比高差約0.34m、市道との比高差約1mを測る。頂部に50×40cmの平たい石が1個ある。第2節(3)で触れたように、大窪人工の屋敷地や大窪道を切り開いた際の残丘という考え方もあり、さらに言えば市道建設の際に生じた可能性も否定できない。



第8図 千人塚全体平面図 (S=1/600)

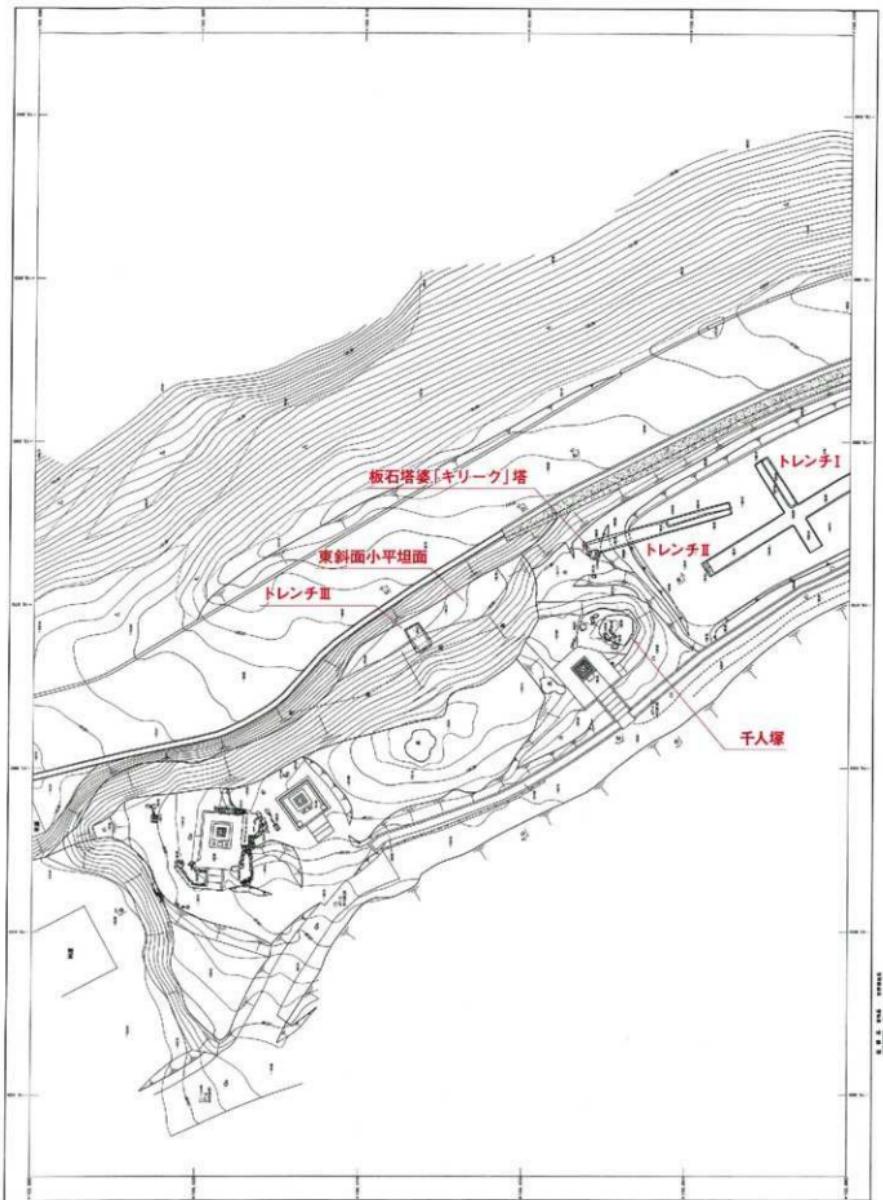


1
2
3



第9図 千人塚平面図(1) (S=1/300)

—
2
3

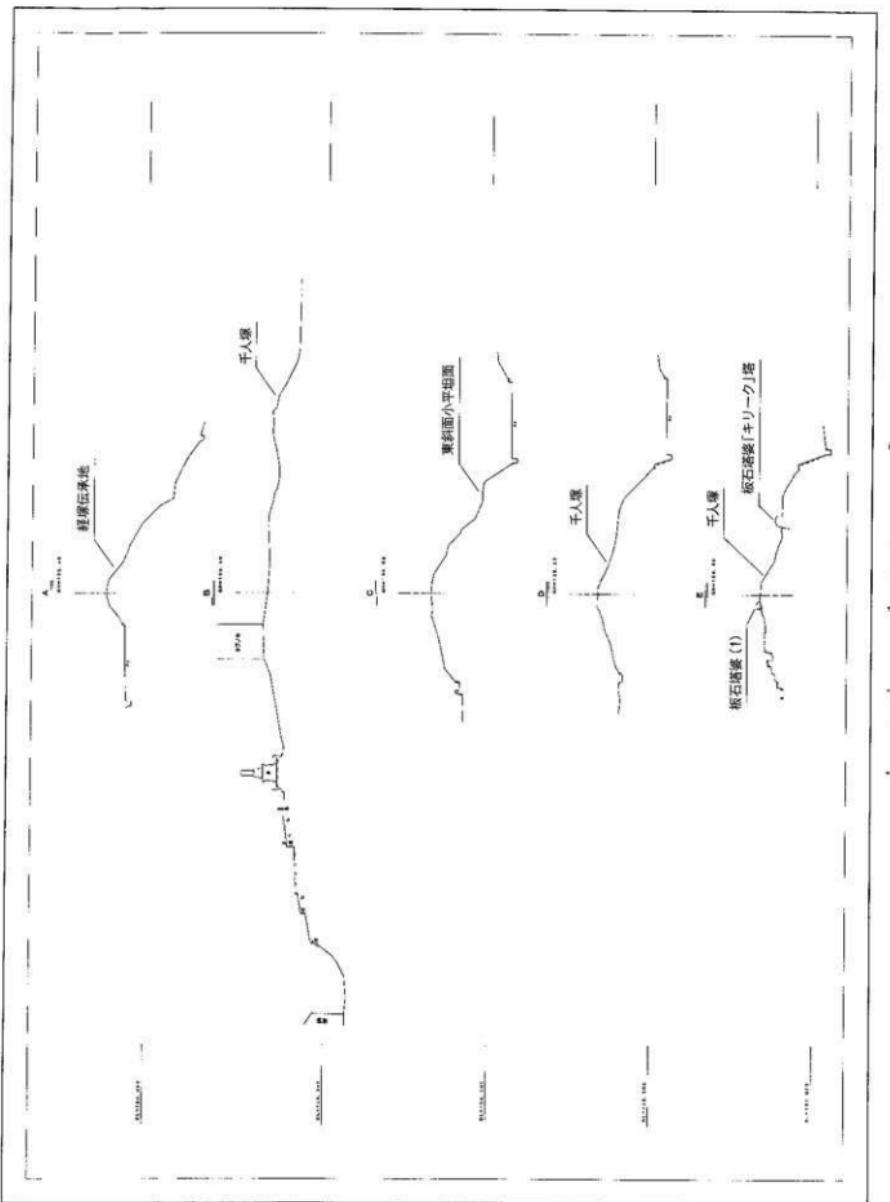


第10図 千人塚平面図(2) (S=1/300)

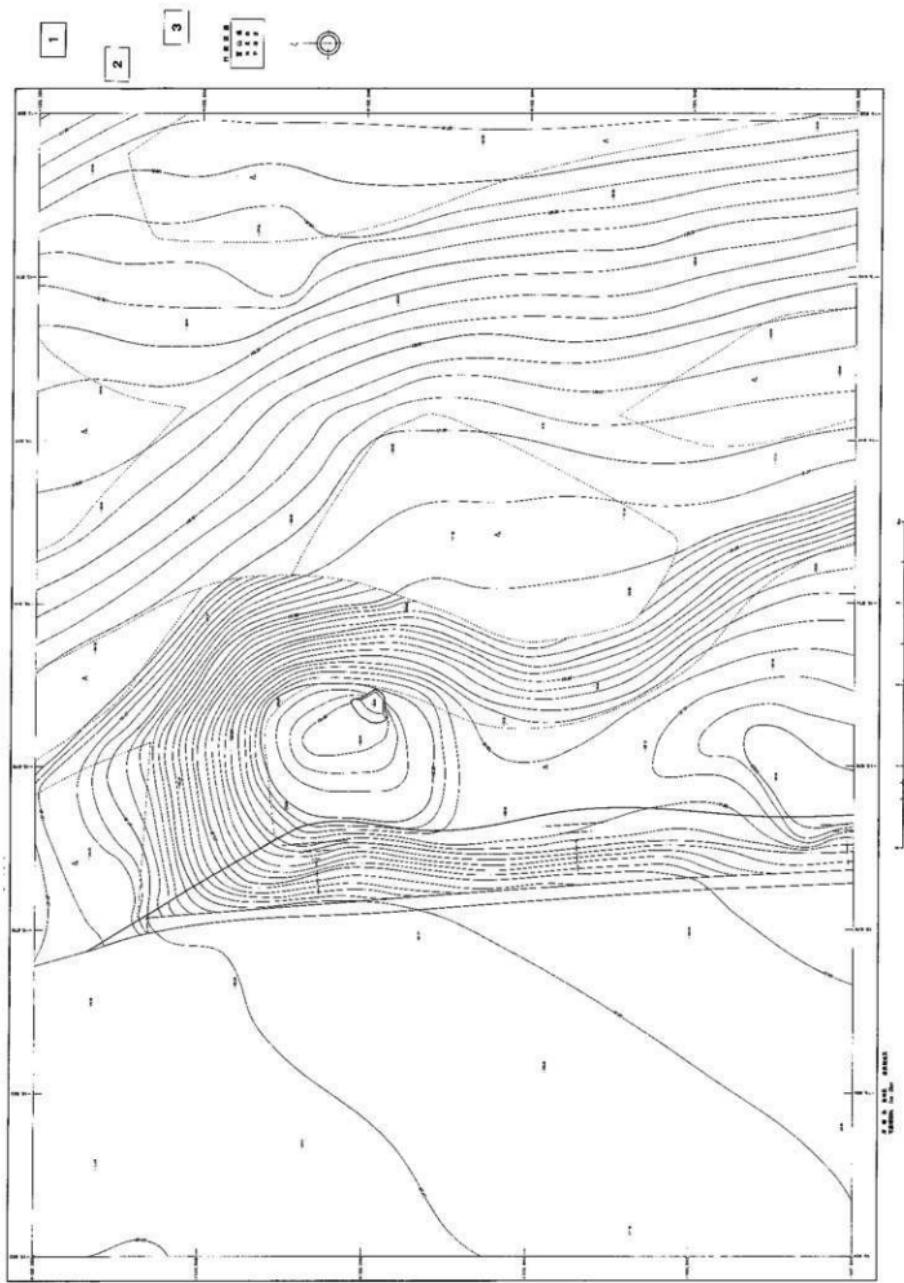
1
2
3



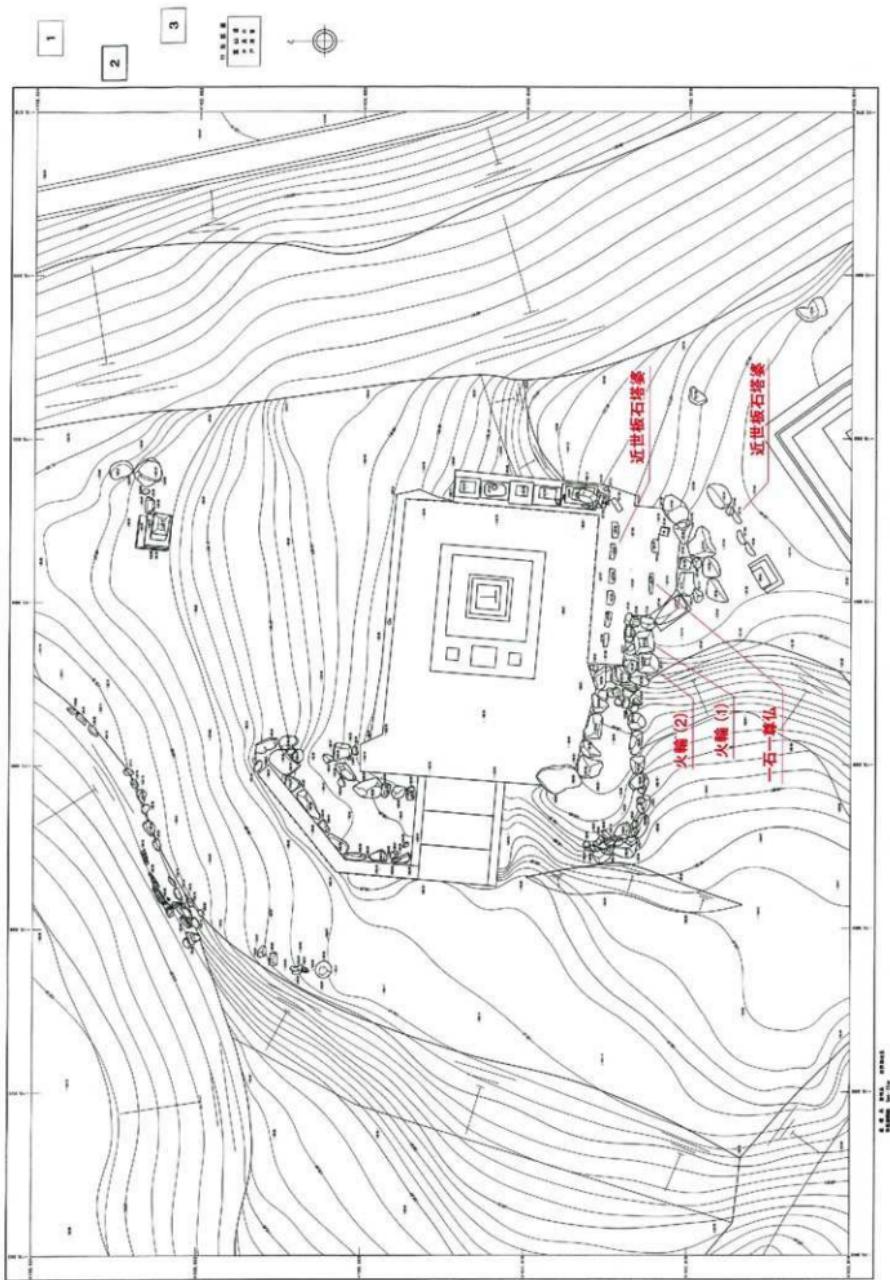
第11図 千人塚平面図(3) (S=1/300)



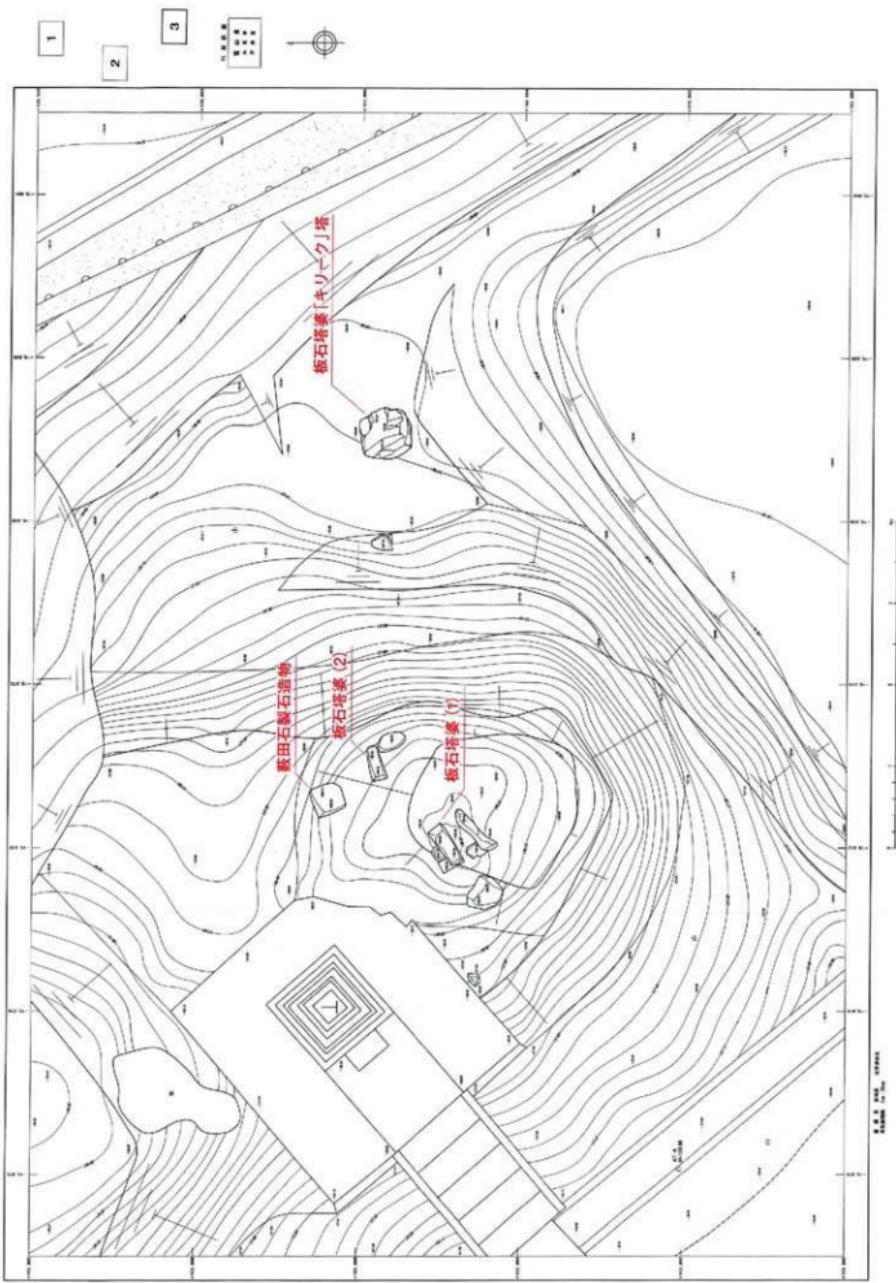
第12図 千人堤断面図 (S=1/300)



第13図 千人塚詳細平面図(1) (S=1/60) 經塚伝承地



第14図 千人塚詳細平面図(2) (S=1/60) 北側墓所



第15図 千人塚詳細平面図(3) (S=1/60) 千人塚

第4節 試掘調査の方法

試掘調査では、発掘作業員の人力によって試掘トレンチを3基設定し、調査を実施した。水田地区にトレンチⅠ、水田地区から板石塔婆「キリーク」塔にかけてトレンチⅡ、東斜面小平坦面にトレンチⅢを設定した。

トレンチⅠは、墓所が続いていると伝承される水田地区の遺構の残存状況を調査するためのもので、水田区画の長軸に合わせて南北方向と東西方向の十字にトレンチを設定した。東西トレンチには一部、地山の把握を行うためのサブトレンチを設定した。

トレンチⅡは、「キリーク」塔の下部と根石、造立の状況、水田地区との関係を把握するためのもので、平成13年度の試掘調査で掘削したトレンチを再掘削し、さらに水田地区に延長した。またトレンチⅡの埋め戻し後、「キリーク」塔の背面および両側面を把握するため、周囲の掘削を行った。

トレンチⅢは、東斜面小平坦面の遺構の有無を判断するためのもので、南北方向の小平坦面に対し直交する方向に設定した。

第5節 試掘調査の成果

(1) トレンチⅠ(第16図)

水田の部分にも墓所が続いている、という伝承を確認するために設定したトレンチである。耕作土は16~26cm程度と非常に浅く、直下に地山であるにぶい黄褐色の泥岩層(第4層)が検出された。地山の上面には、泥岩を碎いたものを1~5cmと薄く敷き詰めて、平らに整地されていた(第3層)。地元の方の話では、これは水田の水はけを良くするためのものであるとのことであった。地山のところどころには、火を焚いたのか炭化あるいは酸化したような箇所も見受けられた。水田を開墾した際に元の地形を大きく削削し、岩盤まで削り込んだものと考えられ、遺構は残っていなかった。また、遺物も出土しなかった。

(2) トレンチⅡ(第17・18図)

板石塔婆「キリーク」塔から水田地区にかけて設定したトレンチである。

第1~5層は水田の開墾に伴うもので、第1・2層が耕作土、第3~5層が整地土層である。第3~5層はトレンチⅠの第3層と対応するものだが、ここでは明褐色~褐色の粘質土・シルト層となる。第1~5層は、開墾の際に入れられた層であるが、現在の水田区画からすると、北側へ1.8m程はみ出している。当初の水田は「キリーク」塔の近くまで、後に区画が整備され現在の水田範囲になったものと推測される。

トレンチⅡの南側では、整地土層の直下に地山である泥岩の岩盤層(第11層)を検出したが、トレンチⅡ中央部付近では地山が落ち込んでおり、そこに、にぶい黄褐色粘質土(第8・9層)が入る。これらの層には地山の泥岩片が多く含まれており、周辺を削削した土を使って、元々あった谷地形を埋めたものと推測される。

谷地形を埋める盛上層(第8・9層)の直下が第10層である。暗褐色のしまりのない土で、この上に「キリーク」塔が造立されている。この第10層が「キリーク」塔造立時に表土であった層と考えられる。

「キリーク」塔は、現状では月輪より上が地上に突出し、蓮華座から下は土に埋まっている。調査では、普段土中にある部分も含めて「キリーク」塔の全体像を把握することができた。「キリーク」塔自体に関する知見は「(4)周辺の石造物」にて述べることとし、ここでは「キリーク」塔下部の根石について記述しておく。

「キリーク」塔の前面下部に置かれた二つの根石は、それぞれ長卵形の川原石(全長42.5cm、直径12.5cm)と角礫(縦12cm、横幅17.5cm)である。厳密には「キリーク」塔の下に敷いてあるのではなく、「キリーク」塔前面下方の底に埋ませた状態となる。なお「キリーク」塔は第10層の上面に置かれるが、

根石は第10層に半ば埋まり込んだ状態である。石動山周辺にある大型の板石塔婆や立石には、砂利敷（一ツ石）や敷石（天正立石）、経石（平沢・里塚遺跡）を伴うものがあるが、「キリーク」塔の下部周辺には根石以外の配石は存在しない。

上表上と推測される第10層の上には、しまりのない褐色粘質土（第7層）が堆積する。この第7層は谷地形を埋める盛土層（第8層）よりも後に堆積したものである。第7層の上面はちょうど「キリーク」塔の蓮華座下辺ライン付近となる。第7層の上に堆積するのが、現在の表土となるにぶい黄褐色粘質土（第6層）で、この土で「キリーク」塔の蓮華座部分が埋まっている。

トレンチⅡの埋め戻し後、「キリーク」塔の背面・側面の確認のため、周囲を掘削した。「キリーク」塔の土中に埋まる部分に年次などの刻字の存在が期待されたが、残念ながら背面・側面にはほんの自然石のままで、刻字は残されていなかった。また、背面・側面には根石は入れられていなかった。「キリーク」塔は上方が前傾しているうえ、下部に厚みがないため、そのまま据え付けたのでは安定しないと推測される。そこで、「キリーク」塔が前方に転倒することを防ぐために、前面に限って根石が施されたのではないかだろうか。ただし、右側面では「キリーク」塔が泥岩片の上に直接載っている様子が観察でき、この泥岩が、根石に類するものである可能性も残る。

トレンチⅡ北側の抜取部では「キリーク」塔の向かって右側に集石が検出された。これは15~27cmの角礫3個からなり、第7層上面に配される。そのほかにも「キリーク」塔周辺には、第6層を中心とする角礫が多く混じる。集石が意図的なものかは不明だが、周辺の角礫も含め、第6層の土を盛った際に混入したものであることも想定されよう。また、これら集石や角礫が「キリーク」塔の崩れた上部破片である可能性も考えられる。

なお、トレンチⅡからは遺物は出土しておらず、水田開墾の際に「大きな石」の下に埋めたとされる出土品も確認できなかった。

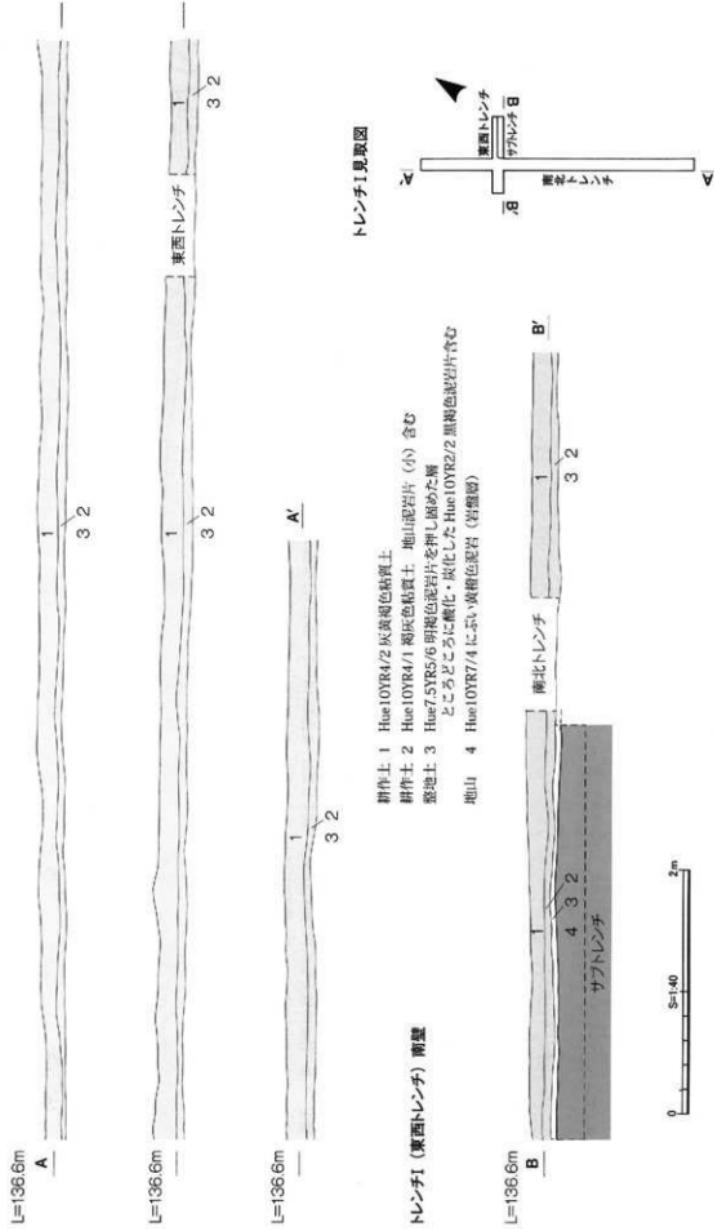
ここで、「キリーク」塔の造立と埋没の過程についてまとめておく。「キリーク」塔造立以前の表土となるのが第10層である。この上面に「キリーク」塔が造立され、その際に前面下部に根石が施された。造立後、時間的な経過は不明だが、近辺から得た土を用いて「キリーク」塔の南側の谷地形を埋め（第8・9層）、「キリーク」塔の周りにも土が入れられた（第7層）。この時点で「キリーク」塔下部や根石は土中となり、蓮華座より上が地上に出ている状態となった。この後の経過も不明である。だが、この土に集石が配されていることから考えて、集石が人為的なものであるか否かに問わらず、第7層の堆積から第6層の堆積の間には時間的な開きがあったものと考えられる。第6層は現在の表土となっている層で、この土が盛られたことにより「キリーク」塔の蓮華座は埋没した。水田の整地土（第3~5層）と耕作土（第1・2層）は、「キリーク」塔造立後の盛土層である第6層から第8層を削り込んでから盛られている。よって、昭和初め頃と伝えられる水田の開墾以前には、すでに「キリーク」塔は半ば埋没していたものと考えられる。

（3）トレンチⅢ（第18図）

東斜面小平坦面に設定したトレンチである。地山（第3層）はにぶい黄橙色を呈する泥岩の岩盤層で、ゆるい段を有し、やや東側に傾斜するものの、ほぼ平坦な面を作り出される。その上にかぶさる2層の表土層（第1・2層）は、いずれもしまりが無く、堆積した腐葉土や斜面からの流土と考えられる。第1層から近現代の磁器類やガラス片が出土したが、これは近年までここに立てられていた現代の五輪塔に伴うものであろう。

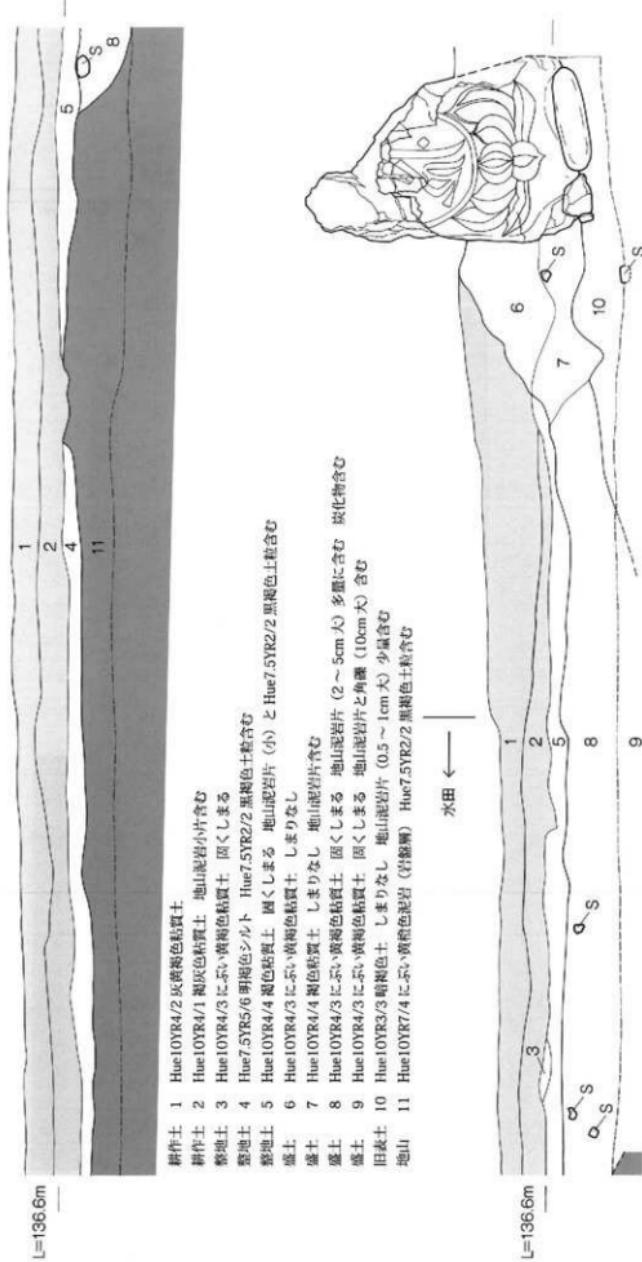
この平坦面は、小丘と市道に平行している様子から、見ようによつては市道として整備される以前の大淀道の名残とも考えられる。ただし地元の方からは、市道整備の際には、元の道をあまり掘り下げていない、という話が聞かれるため、道跡である可能性は低かろう。むしろ市道拡幅前はもっと広い平坦面があったか、あるいは第3節で触れたように、平坦面自体が市道拡幅の際に生じた可能性についても考慮する必要がある。

トレンチ1 (南北トレンチ) 西壁



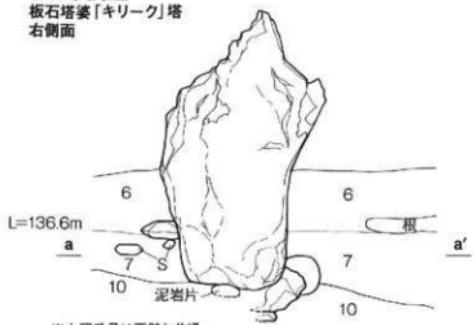
第16図 トレンチ断面図(1) (S=1/40) トレンチ1

トレンチII壁

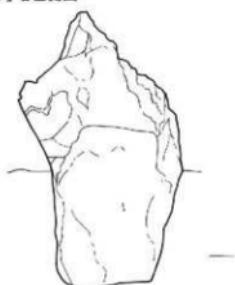


第17図 トレンチ断面図(2) (S=1/20) トレンチII

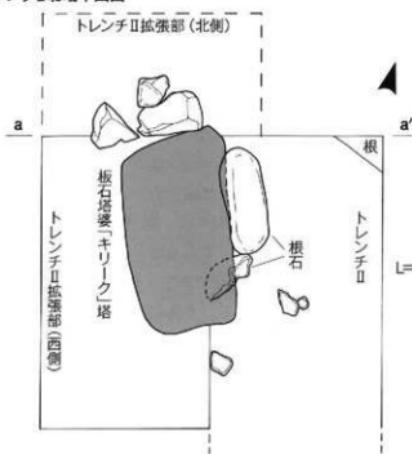
トレンチII北壁
板石塔婆「キリーク」塔
右側面



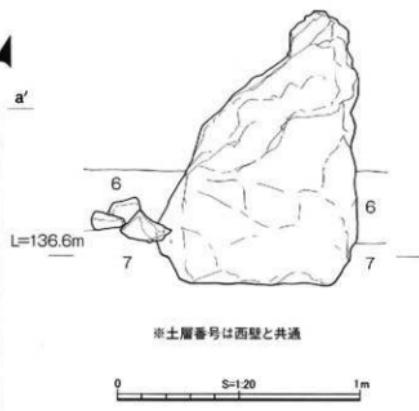
板石塔婆「キリーク」塔左側面



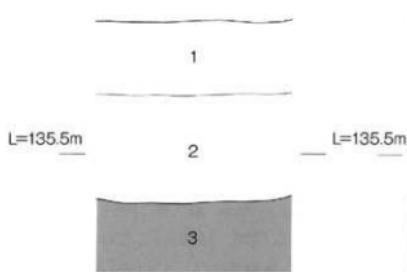
トレンチII北端平面図



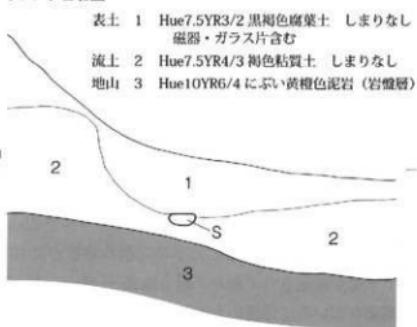
板石塔婆「キリーク」塔背面



トレンチIII西壁



トレンチIII北壁



第18図 トレンチ断面図(3) (S=1/20) トレンチII・トレンチIII
板石塔婆「キリーク」塔立面図・トレンチII北端平面図 (S=1/20)

(4) 周辺の石造物(第19図・図版5~8)

板石塔婆「キリーク」塔

千人塚の東側に造立された自然石の板石塔婆である。地上部の風化が著しく、上部が大きく欠損するほか、一部に剥離等も見られる。石材は安山岩である。残存高114cm、全幅84cmを測る。側面から見ると厚みのある上部に対して下部はすばまり、厚さは40~60cm程度となる。正面観は下彫れで安定感のある形状だが、下部の厚みがなく、上部が前傾しているため、実際は重心が偏ってやや不安定である。

石材正面の平坦な面に月輪を大きく押型彫し、その中に阿弥陀如来の種子「キリーク」を押型彫する。月輪の外径は48cmを測る。月輪を請ける蓮華座は、石材の形に左右されて向かって左側がやや窮屈に感じるものの、月輪より幅広く、平面いっぽんに大きく彫刻される。蓮華座は、西井龍儀氏が「中央の蓮弁は稜を持つ二葉を向かい合わせ、さらに二葉ずつ左右に分ける。反化的中央は重弁で、左右は上の二葉分の長さに広げた特徴ある蓮弁を線刻する」としたものだが(西井2007)、今回の調査で新たな知見を得た。蓮華座の彫刻は、線刻を基本とするものの、請花の、向かって右端の蓮弁のみ「キリーク」や月輪と同様の押型彫となる。また、請花中央の蓮弁は、中央の細い蓮弁を左右の湾曲した蓮弁が包み込むような彫り方となっている。つまり、線のつながり方だけを見れば、六葉ではなく七葉となる。造立の年代については、14世紀中葉以前とする説と15世紀代あるいはそれ以降とする説があることは第2節で紹介したとおりである。この年代観については次章で検討を加える。

板石塔婆

(1)は千人塚頂部に板石などとともに横たえてあるもので、正面に五輪塔图形を刻んだ方錐角柱形板石塔婆である。五輪塔图形は陽刻であるが、やや彫りが浅く、周辺部もあまり彫り下げられていないため、一部は太い線刻状にも見える。水輪部に梵字「パン」が刻まれるが摩滅が著しい。全高53.6cm、最大幅22cm、厚さ12.8cmを測る。石材は、灘浦海岸一帯で産出する石灰質シルト岩(微粒砂岩)で、萩出石と呼ばれるものである。なお、この板石塔婆は、現在は塚上に寝かせてあるが、「富山県石動山信仰遺跡調査報告書」掲載の写真では千人塚上に立てられているのが確認できる。(2)は千人塚頂部からやや北東側に下がった地点に横たえてある方錐角柱形板石塔婆である。全体に摩滅しているため、種子等は判別できない。石材は、板石塔婆(1)と同じく萩出石製で、全高46cm、最大幅17.2cm、厚さ11.7cmを測る。(1)・(2)ともに15世紀代とみられる。

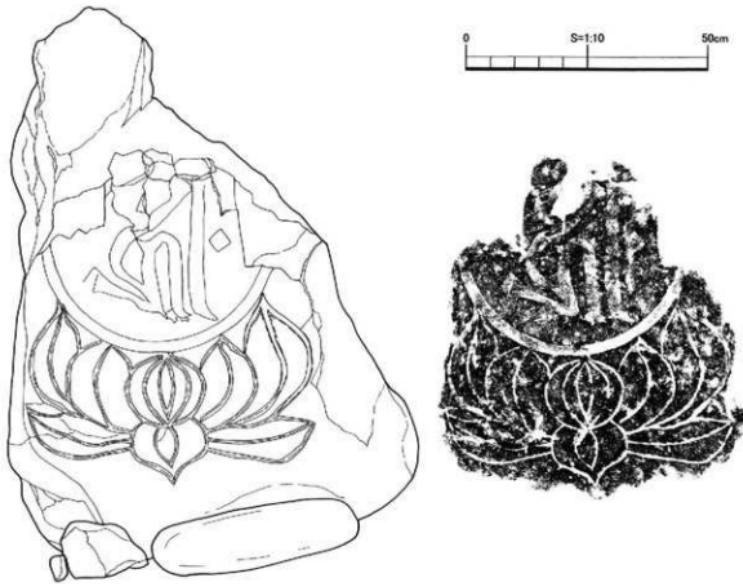
五輪塔 火輪

千人塚の北側墓所に五輪塔の火輪が2基寄せられている。(1)は屋根が低いもので、全高16cm、残存幅27.1cmを測る。(2)は屋根が高いもので、全高22.1cm、残存幅23.8cmを測る。石材はどちらも粗粒砂岩である。いずれも軒先の反りからや古手のものと考えられ、14世紀までさかのほる可能性がある。なお千人塚周辺には、火輪2基のほかに後述の地輪の可能性がある石造物以外、五輪塔部材は見当らない。

その他の石造物

今回は図示していないが、千人塚周辺にはほかにもいくつかの石造物が集積されている。図版8-1は千人塚上に埋まる萩出石製の石造物である。表面に露出している部分で34×37cmのはば正方形で、五輪塔の地輪もしくは基礎石と考えられる。千人塚の北側墓所には、近現代の墓石の周辺に火輪以外にも石造物が集積されている(図版8-3~5)。中世と考えられるものとして粗粒砂岩製の如来形・石一尊仏が1体ある。現在は墓石として下部がモルタルで固められており、地上高39cm、最大幅24cmを測る。そのほか五輪塔图形を浮彫した小型の板石塔婆が計10基並べられている(第6・14図)。こちらもモルタルで下部が固定されており、地上高23~30cm、幅17~18cmを測る。水輪部には「パン」や「キリーク」が刻まれている。近世のものと見られるが、近年の擬古的作品とする見方もある(京田・岡本1984)。

板石塔婆「キリーク」塔



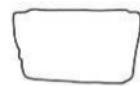
板石塔婆(1)

—



板石塔婆(2)

—



0
S=1/8
40cm

火輪(1)



火輪(2)



第19図 石造物実測図 板石塔婆「キリーク」塔 (S=1/10)
板石塔婆(1)(2)・五輪塔火輪(1)(2) (S=1/8)

第4章 まとめ

ここで若干の考察を加え、まとめにかえたい。

板石塔婆「キリーク」塔の造立年代

まず、「キリーク」塔の造立年代について考察しておく。「キリーク」塔の造立年代は、これまで14世紀中葉以前と推測してきたが、近年は15世紀代あるいはそれ以降とする説も出されている。

石動山登山道周辺の大型板石塔婆の中で紀年銘が残るものには、永禄8年(1565)銘の虎石や天正5年(1577)銘の天正立石、天正6年(1578)銘と推定される鐘石などがあり、その他の大型板石塔婆についても同様の戦国時代末期の造立が推測されている。虎石、天正立石をはじめ、永禄や天正とされる板石塔婆の種子は多くが押型彫で、鐘石は蓮華座も押型彫となる。これらを勘案すると、同様に押型彫で種子を刻み、蓮華座の一部を押型彫とする「キリーク」塔のみを極端に占くみることは難しいのではないか。例えば「キリーク」塔同様、月輪内に大きく「パン」を押型彫する一里塚西下塔はバランスが崩れた蓮華座から天正立石より後出るとされる(第20図)。「キリーク」塔の蓮華座は、一里塚西下塔のやや稚拙ともいえる蓮華座ほど崩れているわけではないが、線刻と押型彫の混在に感じられる迷いや、独特の意匠などは模倣・後出性の表れではないだろうか。よって「キリーク」塔は、石動山登山道周辺の大型板石塔婆の多くと同じく16世紀後半、戦国時代末期の造立で、それも天正立石の天正5年(1577)や鐘石の天正6年(1578)を下る可能性があるものと判断したい。

板石塔婆「キリーク」塔の造立過程

今回の調査で、「キリーク」塔の造立と埋没の過程についてある程度推測できた。「キリーク」塔が現在地に造立された後、南側の谷を埋める盛土が施され、その際に蓮華座の下部までが十に埋没した。この谷を埋める作業は、「キリーク」塔の造立から一連のものとして行われた可能性もある。蓮華座より上を見せた状態がしばらく続き、その間に上部が崩れた可能性がある。その後さらに上が盛られ蓮華座が埋没、現在のように上半のみ地上に突き出た状態となった。昭和初め頃とされる水田開墾はさら以後である。以上の流れからすると、水田開墾時の移設を裏付ける証拠はなく、「キリーク」塔は造立当初の位置を保っている可能性が高い、と判断できる。

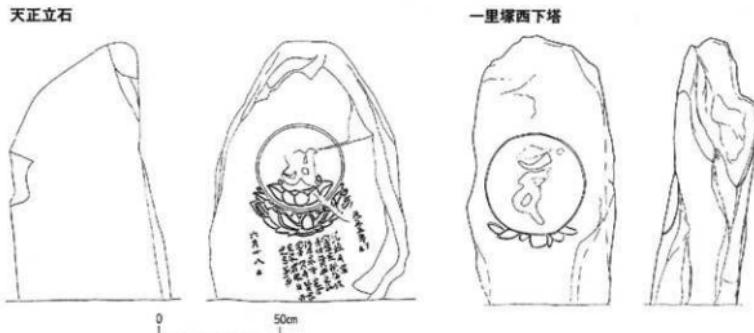
地元で伝わる移設したという「大きな石」は、千人塚にある方錐角柱形板石塔婆や板石のことを指すのではないだろうか。埋められたという出土品も「キリーク」塔周辺では確認できなかったが、千人塚の方に埋められているのかもしれない。

千人塚と「キリーク」塔、大窪道

「キリーク」塔が造立当初の位置を保っているとすれば、「キリーク」塔が正面を向いている現在の市道こそが、かつての大窪道であった蓋然性が高い。現在の市道は、元の道を掘り下げずに拡幅されたということだが、そうであれば、「キリーク」塔は道を往く人々から見上げられる位置に造立されていたことになる。「キリーク」塔は、上部のちょうど月輪と種子が刻まれた部分が前傾しており、下に根石を敷いてまでこの角度が保持されている。これは道からの日線を意識しているのではないだろうか。この大窪道との関係性は、「キリーク」塔の勝示石的性格を表しているものと理解したい。その一方で、千人塚については石動山合戦の死者を出したものとも伝えられてきた。千人塚の築造年代が「キリーク」塔と同じ16世紀後半とは断定できず、周辺の石造物の年代によっては15世紀や14世紀にさかのほる可能性もある。ただ、大窪道から見て千人塚を背に「キリーク」塔が立つ立地からすれば、たとえ年代にずれがあったとしても両者が不可分の関係にあることに違いはない。鈴木景二氏は、天正立石など逆修供養塔とされるものについても、勝示として建てられたという考え方と矛盾することではないとし、石動山の境界にある板石塔婆は、必要に応じ、その都度賣捨によって建てられた勝示・結界碑であると解釈している(鈴木2007)。そうだとすれば、千人塚や「キリーク」塔自体がそもそも供養塚や墓として築造されたものであったとしても、「キリーク」塔の勝示石的性格を否定するものではなかろう。

さて、天正15年(1587)には大庭大工の移住によって大庭村が成立し、千人塚周辺の状況は一変したと考えられる。「キリーク」塔の下半が埋め立てられた時期もまた、その天正15年をあてることができるのではないか。例えば村の成立によって榜示石としての意味合いが薄れたことが「キリーク」塔埋没の原因であったのかもしれない。そして、その後は石動山合戦の記憶と結びつき、戦死者に対する供養碑として大庭村の人々によって守り伝えられてきたのであろう。

市道の拡幅工事によって開削が計画されている水田地区と東斜面小平坦面については、明確な遺構が残されておらず、工事可能と判断した。よって周辺の地形は改変され、中世以来の大庭道は現在以上に様変わりしてしまうことになるが、千人塚自体と板石塔婆「キリーク」塔は現状保存が可能となった。今後も中世から近世の石動山信仰を物語る遺跡のひとつとして保護に努めていきたい。



第20図 天正立石・一里塚西下塔実測図 (S=1/20) (西井 2007より転載)

引用・参考文献

- 石川県鹿島町 2004 「国指定史跡 石動山」北國新聞社
- 円仏三郎英之 1984 「越中朝參道路の概要」『富山県石動山倒仰遺跡遺物調査報告書』永見市教育委員会
- 京田真志・岡本恭一 1984 「石動山関係遺跡」『富山県石動山倒仰遺跡遺物調査報告書』永見市教育委員会
- 櫻井義一 1989 「遺跡資料」『国指定史跡石動山文化財調査報告書』一八代仙ダム計画関連一 石動山文化財調査団・永見市教育委員会
- 鈴木景二 2007 「石動山の中世末期の板石塔婆」『永見市史』10 資料編 8 文化遺産
- 石動山文化財調査団・永見市教育委員会 1989 「国指定史跡石動山文化財調査報告書」一八代仙ダム計画関連一
- 西井健機 2007 「石動山登山道の主要板石塔婆」『永見市史』10 資料編 8 文化遺産
- 永見市 2000 「永見市史」6 資料編 4 民俗・神社・寺院
- 永見市 2002 「永見市史」7 資料編 5 考古
- 永見市 2004 「永見市史」8 資料編 6 緯図・地図
- 永見市 2006 「永見市史」1 通史編 1 古代・中世・近世
- 永見市 2007 「永見市史」10 資料編 8 文化遺産
- 永見市教育委員会 1984 「富山県石動山倒仰遺跡遺物調査報告書」
- 永見市教育委員会 2004 「永見市埋蔵文化財分布調査報告(丘陵地区) IV」永見市埋蔵文化財調査報告第 40 号
- 永見市教育委員会 2005 「永見市埋蔵文化財分布調査報告(丘陵地区) V」永見市埋蔵文化財調査報告第 43 号
- 永見市教育委員会・八代仙ダム建設計画に係る文化財調査団 1986 「八代仙ダム建設計画に係る文化財調査概報 一地形地質・生物・埋蔵文化財一」



1



2



3



4



5

図版 1 1. 千人塚遠景 (南東から) 2. 千人塚遠景 (東から) 3. 千人塚遠景 (北から)
4. 板石塔婆「キリーグ」塔 5. 大道から見上げた「キリーグ」塔 (中央)



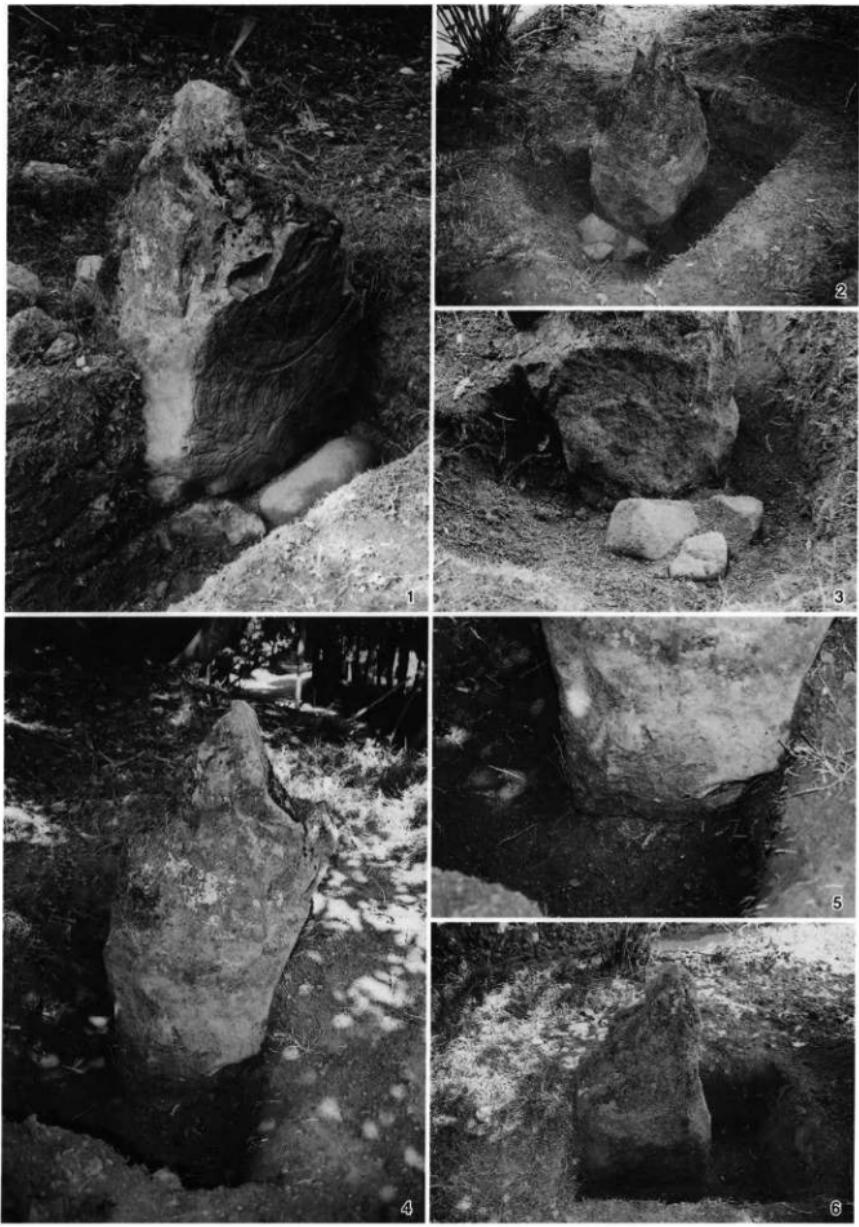
図版2 1. 千人塚近景(南東から) 2. 千人塚近景(南から)



図版3 1. 水田地区近景(南東から) 2. トレンチI完掘状況(南東から) 3. トレンチI完掘状況(東から)
 4. トレンチI完掘状況(北東から) 5. トレンチI西壁(南側・北東から) 6. トレンチI西壁(北側・東から)
 7. トレンチI南壁(東側・北から) 8. トレンチI南壁(西側・北から)



図版4 1.トレンチⅡ完掘状況(南東から) 2.トレンチⅡ西壁(南側・北東から)
 4.トレンチⅡ西壁(北側・南東から) 5.トレンチⅡ西壁(北側・東から) 3.トレンチⅡ西壁(中央・東から)
 7.トレンチⅡ北壁(西側・南から) 8.トレンチⅡ北壁(東側・南から) 6.「キリーク」塔下部の根石



図版5 1.「キリーク」塔(正面) 2.「キリーク」塔(左側面) 3.「キリーク」塔下方の集石
4.「キリーク」塔(右側面) 5.「キリーク」塔下部の泥岩 6.「キリーク」塔(背面)



2



3

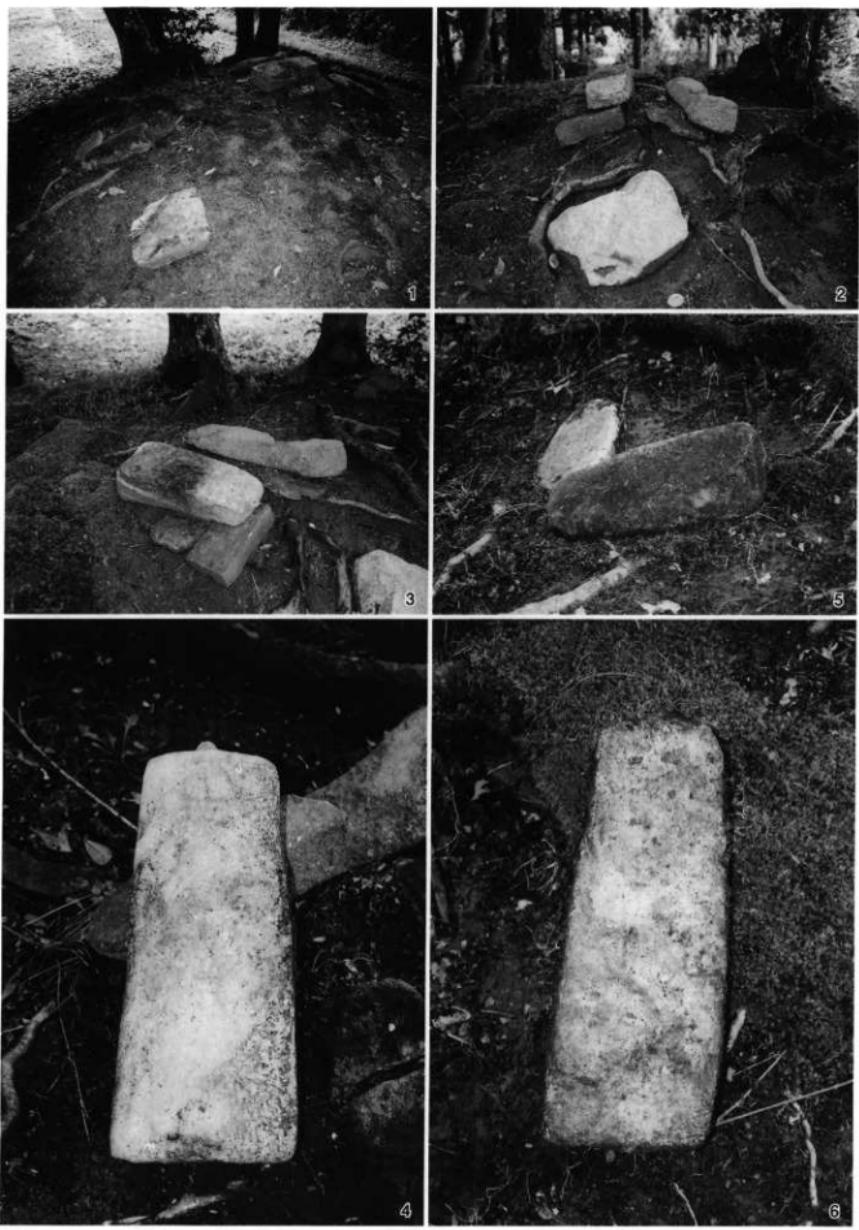


4

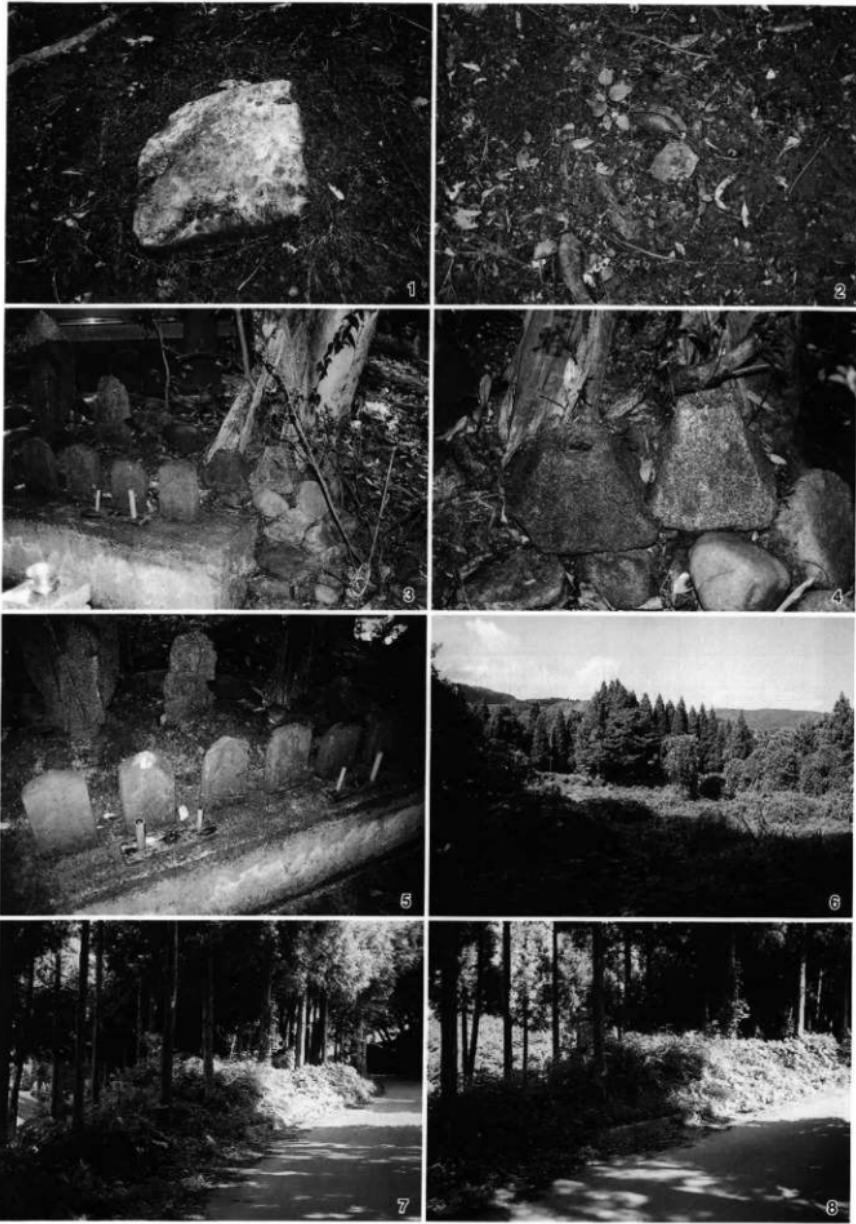


5

図版6 1.「キリーク」塔正面の彫刻 2. 東斜面小平坦面(北から) 3. 東斜面小平坦面(南東から)
4. トレンチⅢ西壁(南東から) 5. トレンチⅢ北壁(南から)



図版7 1・2. 千人塚上の石造物・自然石 3・4. 板石塔婆(1) 5・6. 板石塔婆(2)



図版8 1. 千人塚上の敷田石製石造物 2. 千人塚周辺の骨壺破片 3. 千人塚北側墓所の石造物
 4. 五輪塔(火輪) 5. 近世の板石塔婆と一石一尊仏 6. 寺院伝承地(南西から) 7. 経塚伝承地(北から)
 8. 経塚伝承地(西から)

報告書抄録

ふりがな	せんにんづか
書名	千人塚
副書名	一般県道平・阿尾線地方特定道路事業に伴う試掘調査概要
卷次	
シリーズ名	水見市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第54冊
編著者名	廣瀬 直樹
編集機関	水見市教育委員会
所在地	〒935-0016 富山県水見市本町4番9号 TEL.0766(74)8215
発行年月日	2009年12月18日

ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
せんにんづか 千人塚	ひらし じ しつかや 水見市平津宮	16205	378	36° 56' 10"	136° 59' 24"	20090806 ~ 20090907	37.2 m ²	一般県道平・ 阿尾線地方 特定道路事 業
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
千人塚	中世墓 近世墓 経塚	中世 近世	墳・経塚・平坦面	板石塔婆「キリーグ」塔 方錐角柱形板石塔婆 五輪塔(火輪)	中近世の石動山信仰 開墾遺跡。大型板石 塔婆が造立当初の位 置を保っていることを 確認した。			

千人塚は、中世における石動山への主参道であった大淀道沿いに所在する遺跡である。「千人塚」と称される塚状遺構と大型の板石塔婆「キリーグ」塔、経塚伝承地、近世から近現代に至る墓所から構成される。市道拡幅により開削が計画される水田地区と東斜面小平坦面では、明確な遺構は確認できなかった。一方、「キリーグ」塔の下部には根石の存在が確認され、造立・埋没の状況が明らかとなった。造立は16世紀後半と推測され、造立当時の位置を保っているものと考えられる。「キリーグ」塔は正面を大淀道へ向けており、石動山への登山道の路傍に位置する勝手口の性格がうかがわれる。

平成21年12月14日印刷
平成21年12月18日発行

水見市埋蔵文化財調査報告第54冊

千人塚

一般県道平・阿尾線地方特定道路事業に伴う試掘調査概要

編集・発行 水見市教育委員会

〒935-0016

富山県水見市本町4番9号

TEL.0766(74)8215

印 刷 株式会社アヤト